

宮崎学園都市 埋蔵文化財発掘調査概報

(IV)

1983

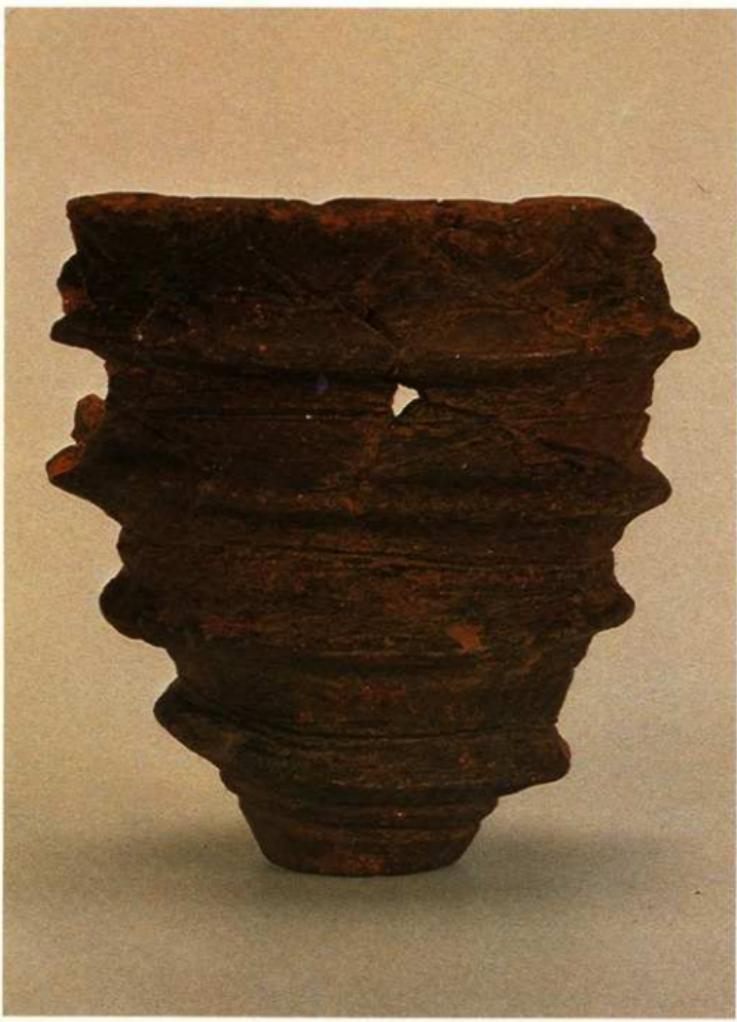
宮崎県教育委員会

**宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報**

(IV)

1983

宮崎県教育委員会



平烟遗址XXIV区出土丹塗磨研深鉢型土器



平烟遺跡XXIV区出土岩偶

序

宮崎県教育委員会は地域振興整備公団の委託を受けて、昭和55年度から宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。本年度は昨年度に引き続き10号地、11号地、14号地の残部の遺跡と新たに4号、9号遺跡について調査を行いました。本書はその概要報告であります。

本年度の調査においても、昨年度に続き縄文後期の住居跡群の発掘や弥生後期から終末期にかけての豊穴住居群、さらに古代から中世にかけての掘立柱の遺構など数多くの遺跡群を明らかにすることができました。

さらにまた、9号地においては、先土器時代の石器を多数発見することができました。この種の発掘調査例が少ない本県にとっては縄文後期の集落群の確認と併せて特筆されることと存じます。

なお、これらの貴重な調査の成果が学術関係者だけではなく社会教育や学校教育の分野にも広く活用されると共に、文化財保護行政推進のための一役となることを期待します。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力をたまわった地域振興整備公団及び地元市町並びに関係各位に衷心から謝意を表します。

昭和59年3月1日

宮崎県教育委員会

教育長 後藤 賢三郎

例　　言

1. 本書は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて実施した、宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡群の昭和58年度の発掘調査概要報告書である。

2. 各遺跡の調査期間、調査担当者は次の通りである。

①浦　田（4号地）遺跡	昭和58年10月12日～昭和59年3月19日
	（調査担当者） 谷口
②堂地西（9号地）遺跡	昭和58年4月18日～昭和59年3月9日
	（調査担当者） 永友・日高
③平　畑（10号地）遺跡	昭和58年7月18日～昭和59年3月19日
	（調査担当者） 北郷・菅付
④堂地東（11号地）遺跡	昭和58年4月5日～昭和59年2月16日
	（調査担当者） 岩永・長津
⑤熊野原（14号地）遺跡	昭和58年4月5日～昭和59年3月19日
	（調査担当者） 面高・北郷・菅付・谷口
⑥前原南（19号地）遺跡水田	昭和58年5月17日～6月23日
	（調査担当者） 永友・北郷

3. 本書の執筆は、調査員が分担し、文責については目次と文末に明記している。

4. 本書の編集は、調査員で協議の上、北郷と菅付が当った。

5. 本年度の特別調査員は次の通りである。

石丸　洋	九州歴史資料館	橘　昌信	別府大学助教授
市川　米太	奈良教育大学教授	藤原　宏志	宮崎大学助教授
大塚　誠	宮崎大学講師	三辻　利一	奈良教育大学教授
河野　治雄	鹿児島県文化財専門員	村田　修三	奈良女子大学助教授
木全　敬藏	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター測量研究室長	山本　輝雄	九州大学助手
柴田喜多郎	広島大学		

本文目次

I 調査の概要

- | | | |
|--------------------|---------|----|
| 1. 浦田遺跡（4号地遺跡） | （谷口） | 1 |
| 2. 堂地西遺跡（9号地遺跡） | （永友・口高） | 9 |
| 3. 平畠遺跡（10号地遺跡） | （北郷・菅付） | 18 |
| 4. 堂地東遺跡（11号地遺跡） | （岩永・長津） | 27 |
| 5. 熊野原遺跡（14号地遺跡） | （面高・谷口） | 37 |
| 6. 前原南遺跡（19号地遺跡）水田 | （永友） | 52 |

II 結語 — 遺跡の環境と立地の歴史 — (北郷) 56

III 付編

- | | |
|--------------|----|
| 住居跡出土の木材炭化物 | 59 |
| 宮崎大学講師 大塙 誠 | |
| 堂地西遺跡についての所感 | 69 |
| 別府大学助教授 橋 昌信 | |

挿 図 目 次

第1図 学園都市遺跡群位置図	
第2図 浦田遺跡1号土塁実測図および遺物出土状況	3
第3図 浦田遺跡1号土塁出土土器実測図	4
第4図 浦田遺跡2号住居跡実測図	6
第5図 浦田遺跡2号住居跡出土遺物実測図	7
第6図 堂地西遺跡A地区土層断面図	9
第7図 堂地西遺跡A地区集石遺構実測図	10
第8図 堂地西遺跡A地区出土土器実測図(1)	10
第9図 堂地西遺跡遺構分布図	11~12
第10図 堂地西遺跡A地区出土土器実測図(2)	13
第11図 堂地西遺跡B地区集石遺構実測図	14
第12図 堂地西遺跡B地区出土土器実測図・拓影	16
第13図 平畠遺跡 SA 33・34號穴住居跡実測図および遺物出土状態図	19
第14図 平畠遺跡 SA 33出土の縄文土器実測図	20
第15図 平畠遺跡 SA 35出土の縄文土器実測図	20
第16図 平畠遺跡 XXIV区西壁土層断面図	23~24
第17図 平畠遺跡 XXIV区出土遺物実測図	23~24
第18図 平畠遺跡 XXIV区出土岩偶実測図	23~24
第19図 平畠遺跡 XXIV区出土縄文土器実測図・拓影	25
第20図 堂地東遺跡遺構分布図	29~30
第21図 堂地東遺跡5号・16号住居跡実測図	31
第22図 堂地東遺跡1号土壤実測図	33
第23図 堂地東遺跡出土遺物実測図(1)	34
第24図 堂地東遺跡出土遺物実測図(2)	35
第25図 熊野原遺跡B地区遺構分布図	38
第26図 熊野原遺跡B地区出土遺物実測図(1)	40

第27図	熊野原遺跡B地区出土遺物実測図(2)	41
第28図	熊野原遺跡C地区付近の地形	44
第29図	熊野原遺跡C地区東邊構分布図	45~46
第30図	熊野原遺跡C地区掘立柱建物跡1号実測図	48
第31図	熊野原遺跡C地区出土遺物実測図	49
第32図	前原南遺跡位置図	52
第33図	前原南遺跡出土遺物実測図	54

図版目次

図版 1	浦田遺跡(1)	図版14 堂地東遺跡(1)
図版 2	浦田遺跡(2)	図版15 堂地東遺跡(2)
図版 3	浦田遺跡(3)出土遺物	図版16 堂地東遺跡(3)
図版 4	堂地西遺跡(1)	図版17 堂地東遺跡(4)出土遺物
図版 5	堂地西遺跡(2)	図版18 熊野原遺跡(1)
図版 6	堂地西遺跡(3)出土遺物	図版19 熊野原遺跡(2)
図版 7	平畠遺跡(1)	図版20 熊野原遺跡(3)出土遺物
図版 8	平畠遺跡(2)	図版21 熊野原遺跡C地区(1)
図版 9	平畠遺跡(3)	図版22 熊野原遺跡C地区(2)
図版10	平畠遺跡(4)	図版23 熊野原遺跡C地区(3)出土遺物
図版11	平畠遺跡(5)	図版24 前原南遺跡(1)
図版12	平畠遺跡(6)	図版25 前原南遺跡(2)
図版13	平畠遺跡(7)出土遺物	図版26 前原南遺跡(3)出土遺物



第1圖 學園都市遺跡群位置圖

I. 調査の概要

1. 浦田遺跡

遺跡の立地と環境（第1図）

浦田遺跡は清武町大字木原に所在する。学園都市遺跡群のほとんどは清武川と加江田川に挟まれた南側の丘陵（南丘陵）に形成されている。浦田遺跡や下田畠、田上遺跡などは、田上川を挟んだその北側の丘陵（北丘陵）に形成されている。そのなかで浦田遺跡は、標高約21mの南側緩斜面に立地する。当丘陵の中では下位面にあたり谷底低地との比高差は約10mである。

浦田遺跡の上方には、大永六年（1427）の板碑など数基確認され伊東氏、あるいは当遺跡の西へ約1kmのところに約500基にのぼる五輪塔、板碑を検出した山内石塔群との関連が想定される。また谷底低地を挟んだ南丘陵の北斜面には、貝殻文土器、押型文土器、沈線文土器や集石遺構を検出した入料遺跡⁽¹⁾や繩文土器のほかに平安期の堅穴式住居や掘立柱建物など何枚もの文化層をもった赤板遺跡が立地する。⁽²⁾また南丘陵の頂部付近（標高約50m）に立地し、旧石器時代の遺物を多量に出土した堂地西遺跡からは、浦田遺跡が一望できる。⁽³⁾

遺跡の概要

55年度試掘の結果、範囲確認された浦田遺跡のほぼ中央より弥生土器の完形が出土し、1,000 m²を調査区として発掘調査を行なった。

調査を行うにあたり、まず、地形にあわせて東西1～20、南北A～Mとし、5m方眼をもとにグリッドを設定した。地形が南に傾斜することや畑による耕作のためほぼ南北15列をきかいに西側部ではアカホヤ層が削平されていた。東側部ではアカホヤ層上面での面的発掘を行なった。しかし「アカホヤ層」が風化したか、あるいは流れ込みのもので純粹なアカホヤ層でなかったことや遺構内埋土と地山との差異が明瞭でなかったことから遺構検出には困難を伴った。現在のところ検出された遺構は、集石遺構7基、弥生時代後期の堅穴住居址1軒、同時期のものと思われる土塁が10基、平安期のカマドをもつ堅穴住居址1軒、2間×3間に縄庇をもつ掘立柱建物跡1棟がある。そのほかに近世の楚石もつ館跡とそれ伴う井戸、カマド跡が検出されている。西側部では、アカホヤ層がすでに削平されているため東西、南北にそれぞれトレーナーを入れた。その結果、約1mでシラスに達しその堆積からすると、発掘前段階での北から南への傾斜というより北西から南東へ傾斜していると思われる。遺構は、

柱穴が数個検出できたのみであった。

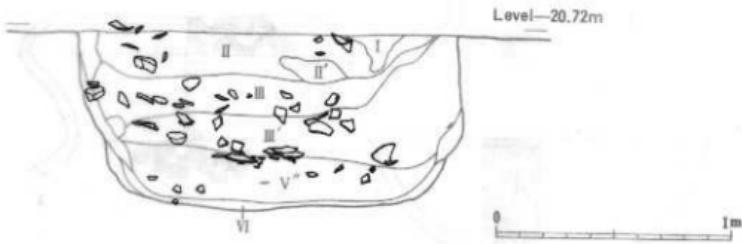
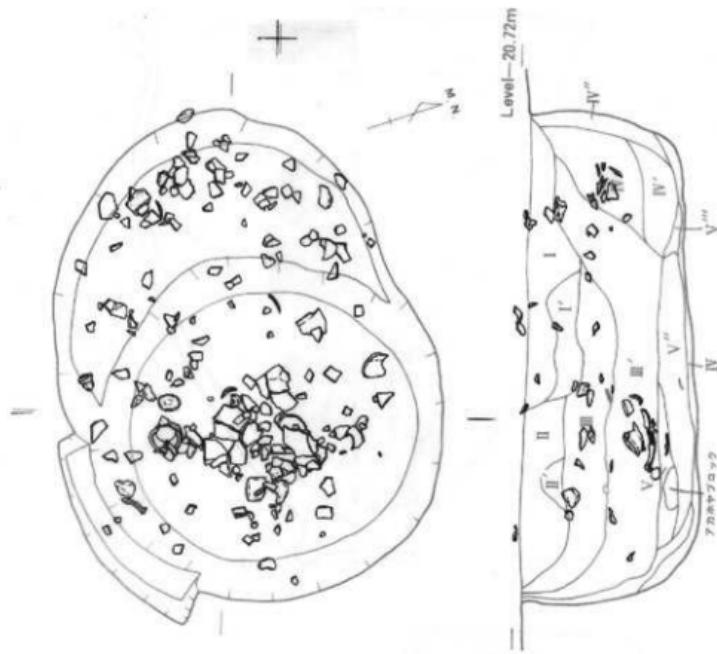
遺物は遺構と同様に幅広く出土している。旧石器時代のものとして黒曜石製の細石刃やナイフ形石器、彫器などがある。縄文時代の遺物は平底式土器や階円、山形の押型文土器のほかに約10点の石鏃が出土している。縄文時代後、晩期の土器は出土していない。弥生土器は住居址、土塗に伴ない多量に出土している。1号土塙は、壺、鉢のほかに二重口縁壺も2個体分出土している。4号土塙は上層から石庵丁が、床面からは器台がつぶれた状態で出土し付近から焼土も検出された。土塙からは必ず2~3個体のミニチュア土器が出土している。掘立柱建物跡に伴うものとして底部にヘラ切り手法をもつ壺が出土している。そのほか内黒で高台付の土師器もみられる。糸切り手法の土師器はまったく出土していない。近世の館跡に伴うもので唐津焼系や伊万里焼系の磁器が出土している。

包含層の状態

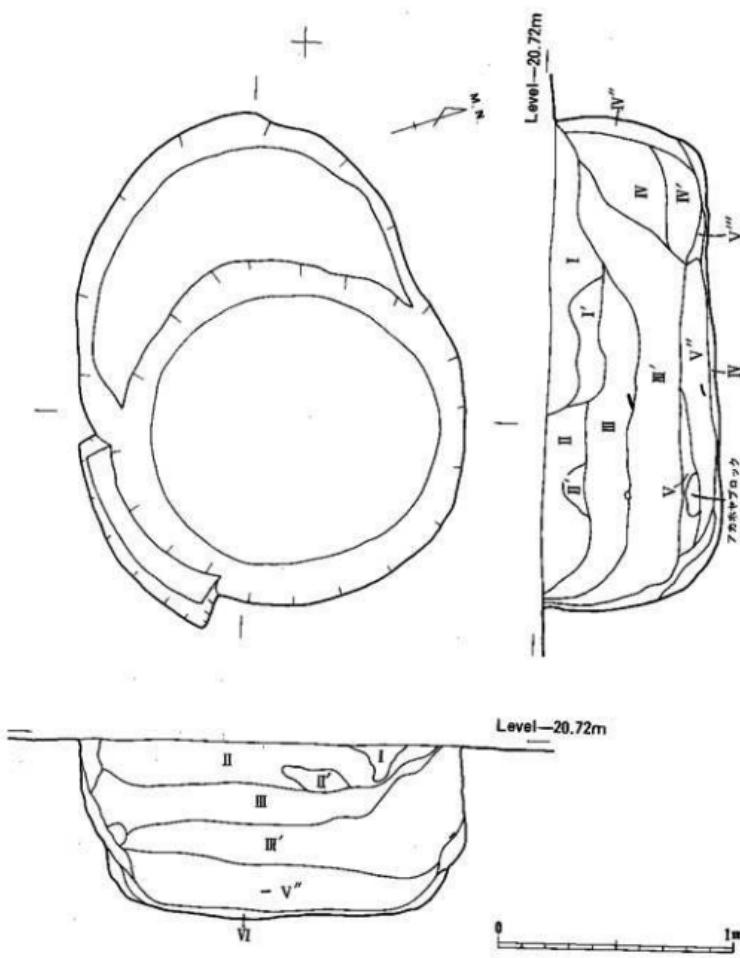
現在の地形は北から南に傾斜するが、発掘によって北→南の傾斜は基本とするがやや北西から南東へ傾斜する地形であることが明らかになった。最上層は褐色の耕作土、第2層は黒褐色土であるが南端部にのみ残存する。第3層は風化あるいは流れ込みのアカホヤ層、第4層がバミス状のアカホヤ層である。以下、黄褐色土、淡黄褐色粘質土、暗黒褐色硬質土となる。調査区の西側部、北側部はすでにアカホヤ層まで削平され、表土除去後、すぐに集石遺構が露出し黄褐色土となる。

1号土塙（第2図）

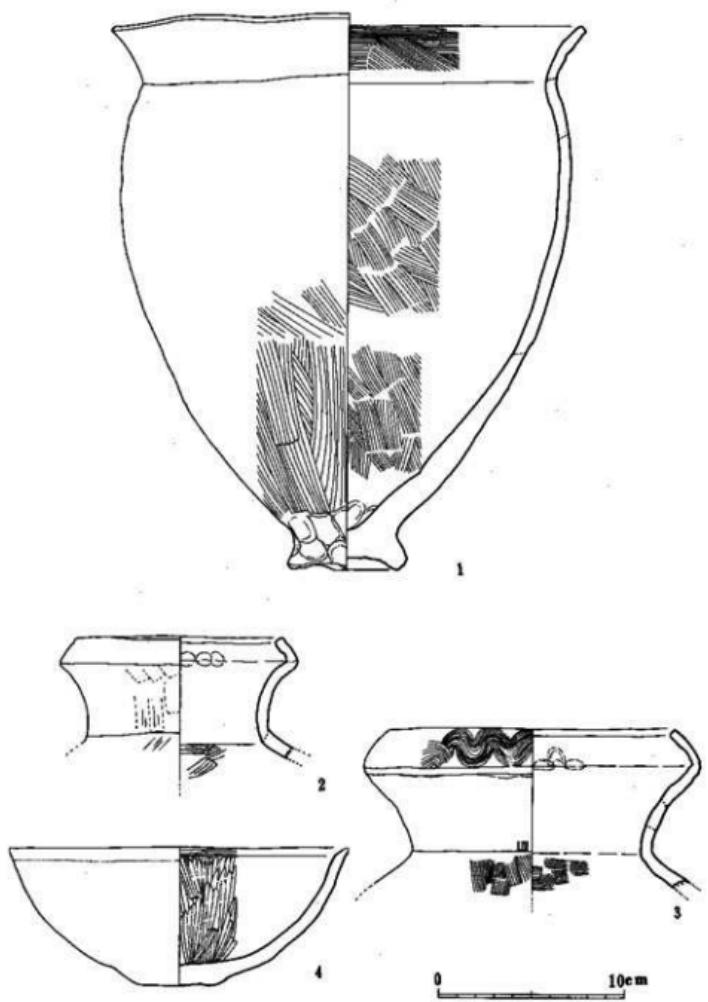
平面形、底面形とも不整階円を呈す。長径2.1m、短径約1.5m、深さ約0.8mである。床面は2段掘り込みになっている。埋土は、かたくしまり基本的に5層にわけられる。第Ⅰ層（明褐色硬質土）、第Ⅱ層（明褐色土）、第Ⅲ層（明褐色硬質土）、第Ⅳ層（暗褐色土）、第Ⅴ層（褐色硬質土）である。土器は、第Ⅰ層から第Ⅴ層までまんべんなく出土しているが、完形の土器がつぶれた状態では出土せずほとんどが破片である。その中で土器は、第Ⅱ層とⅣ層付近に集中している。土器は、西側に集中し二重口縁壺、壺のほかにミニチュア土器、穿孔のある土玉が出土している。また炭化物が第Ⅰ層およびⅠ'層をのぞいてほぼ全層に且つてまんべんなく混入するが、特別の集中は認められない。またⅣ層及びⅣ'層には、炭化物（樹林不明だが目もつまっており、年輪についても硬軟の差異が少なく、硬木、石葉樹林類とおもわれる）が他層に比べ多く認められる。



第2図 浦田遺跡1号土塙実測図および遺物出土状況



第2図 蒲田遺跡 1号土塙実測図および遺物出土状況



第3図 浦田遺跡1号土塚出土土器実測図 (縮尺1/3)

遺物（第3図）

1は口縁部が「く」字状に屈曲し先端近くで更にゆるく外反する。端部は面取りされる。肩部はつよく張らず、底部は上げ底である。外面はナデ、内面はハケ調整である。胴部下半は粗いハケ調整が施される。口径25.6cm、器高30.0cmを測る。2、3は二重口縁壺である。2は口径約12cmを測る。口縁外面に櫛描が施されていたと思われるが磨耗しており明確でない。外面はハケ目のあとナデ調整が施されている。3はやや大型で口径17.4cmを測る。口縁部には細かく密な櫛描波状文が施される。頸部外面ともハケ調整がなされる。4は鉢型土器である。口径18.2cm、器高7.5cmを測り、口縁部はゆるく外反する。外面は摩耗し調整は不明。口縁部内面は横方向のヘラ研磨、内底にかけては縦方向のヘラ研磨が施される。

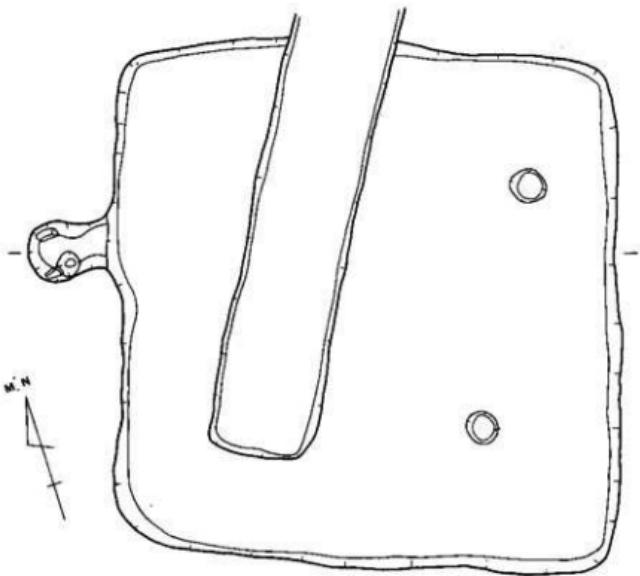
2号住居跡（第4図）

歴史時代に下がる竪穴住居跡は1軒だけである。その他には掘立柱建物跡がある。2号住居跡は東西幅約3.5m南北幅約4.0m、検出面からの深さ約0.3mである。主軸はN-57-Wを示す。柱穴は4個と思われるが2個は攪乱によってなくなっている。西壁やや北よりに接して附設されたカマドをもつ。裾部は馬蹄形をなすと思われるが明確ではなかった。煙道は住居外にのび、約0.5mのところでほぼ垂直に立ちあがる煙出し部をもつ。煙出し部には、支えとして南北に石が2個置かれていた。火床部と思われる場所には焼土は確認できなかつた。しかし、裾部と煙道のさかい付近に立てられた石の上に土師器壺がかぶさった状態で出土しており、支柱としての役割が考えられる。それに対して九例の裾部にも、土師器壺と石が検出されている。煙出し部は、前原南遺跡や浄土江遺跡にみられるように住居外にのびるが、それほど深く地下に掘り込まれていない。埋土にも炭化物あるいは灰などはそれほど認められなかつた。

遺物（第5図）

出土遺物は、カマド内より2点、住居内より1点、底部にヘラ切り手法をもつ土師器が出土している。他には布痕土器が数点出土している。

1、2はカマド内より出土した。1は口径12.0cm、底径7.2cm、器高3.7cm、体部は直線的に外方にのび、淡褐色を呈す。2は口径15.7cm、底径6.9cm、器高5.8cm、内外面ともナデ調整。淡褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内外面に一部ススが付着している。3は口径16.2cm、底径8.1cm、器高5.3cm、淡赤橙色を呈す。内外面に成形時の凹凸を残す。や



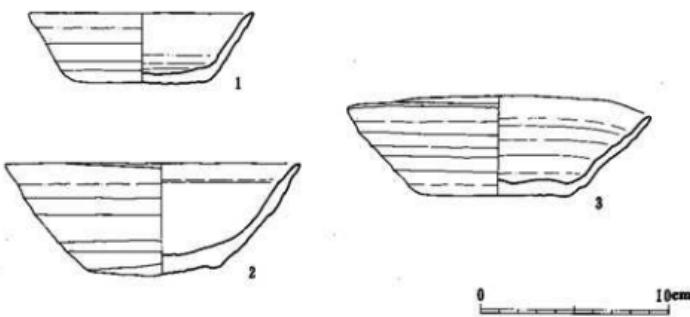
Level - 20.329m



- | | | |
|------------|-----------|-----------|
| I - 暗褐色土 | a - 雜灰褐色土 | e - 赤褐色土 |
| II - 棕色土 | b - 明褐色土 | f - 暗赤褐色土 |
| III - 明褐色土 | c - 暗褐色土 | |
| d - 棕色土 | d - 棕色土 | |



第4図 浦田遺跡2号住居跡実測図 (縮尺1/40)



第5図 浦田遺跡2号住居跡出土遺物実測図（縮尺1／3）

や焼成後の歪みが認められる。

ま と め

浦田遺跡からは旧石器から近世まで幅広い遺構、遺物を確認することができた。旧石器時代の遺物は、ほとんどが表採資料あるが細石刃、ナイフ形石器が見つかっている。また第6層（黄褐色粘質土）より彫器が出土したが、現在のところその他の資料はまだ得られていない。

縄文時代の遺構としては集石遺構がある。いわゆる集石は石蒸しの機能を有するが、今回検出されたものは前原西遺跡にみられるような掘り込みをもつものではなく、平面的に拡がるものばかりである。平面はほぼ円形であるが、小ぶりの礎で構成されるものと、人頭大の礎で構成されるものの2種がある。その他集石とは言い難い散石が認められ、これらはほとんど焼けて非常にもらい。土器は、集石に伴うものかどうかは不明であるが山形、階円などの押型文土器、条痕文土器、前平式の底部や平替式と思われる口縁部が出土している。石器としては石鏃が約10点ほど見つかっているがチャート製が多く黒曜石のものは出土していない。

弥生時代に関してはみるべきところが多い。現在のところ竪穴住居跡1軒、土塙10基が確認されている。特に土塙は、学園都市遺跡群内では初見であり、住居跡等との関連など注

目すべきことが多い。土塙の特徴としては、基本的には平面、底面とも円形を呈す。長径約2.2m、深さは約1.0~1.3mである。埋土も類似し明褐色系の土でかたくつまり、ほぼ全層に炭化物を含む。少量であるが木の実を含む場合もある。土器も全層にまんべんなく拡がって出土する。4号、10号土塙では焼土が確認されている。ほとんどの土塙からミニチュア土器が、2~3個体出土しており祭祀的要素も考えられるが、現段階では、いわゆる貯蔵穴あるいは、廐棄穴としておきたい。

歴史時代になると底部ヘラ切り手法の土師器が多量に出土し、それに伴って高台をもつ黒土器もみられ、赤板遺跡との関係など考えられる。遺構では、カマド付堅穴住居址1軒 2×3 間に総庇をもつ掘立柱建物跡1棟確認された。その他、近世の館跡と思われる楚石とそれに伴なうカマド、井戸など確認された。唐津系、伊万里系の磁器や瓦、擂鉢等日常雑器が多量に出土している。県内では、この時期の窯跡がまだ発見されておらず年代比定など難しいが、他地域との交易関係を知るうえでは重要な一資料となるであろう。

(谷 口 武 範)

註 (1)『山内石塔群』1983 宮崎県教育委員会

(2)『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』I 1980 宮崎県教育委員会

(3)『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』II 1981 宮崎県教育委員会

(4)貯蔵穴とも考えられるが一応ここでは土塙として取り扱った。

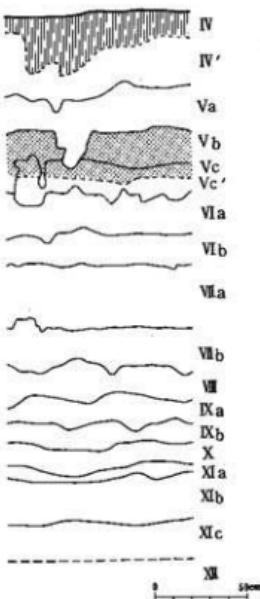
2. 堂地西遺跡（9号地遺跡）

調査区の設定と概要

堂地西遺跡は、堂地東遺跡（11号地）に続く丘陵の最上部に位置し、また学園都市遺跡群の中でも最高所に位置する。まず地形に沿ってトレンチを入れ包含層等の状態によりA、B、Cの3地区を調査地区として設定した。各々GNにあわせて10m×10mのグリッドを設定して調査を行った。全体的に畑作等の開削によりアカホヤ層はほとんど消滅した状態であったが、B地区では表面に多量の土師器片が散布しており、それにともなうビットも検出された。また、A地区では弥生時代の住居址が2軒検出されている。その下層の褐色土層からA、B両地区あわせて27基の集石遺構が検出され、縄文土器、石鏃、石斧等が出土している。その下層の暗褐色土層より6基の集石遺構が検出され、それと共に、ナイフ形石器や剣片尖頭器等が出土している。

包含層の状態

本遺跡では、アカホヤ（第1オレンジ）層までが開削によりほとんど消滅していたので、アカホヤ下層の基本層序（第6図）を見ていくと、IV・褐色硬質土層（縄文早期の包含層）、V・暗褐色硬質土層（小白斑粒を含む暗褐色土塊粒の包含量によりa、b、cの三つに分ける。包含量の密なb、cが旧石器の包含層）、VI・黄褐色砂質土層（第二オレンジ層、aは大粒の砂質層、bは細かく密な砂質層）、VII・黒褐色硬質土層（小白斑粒を多量に含む）、VIII・暗褐色硬質土層、IX・褐色粘質土層、X・淡褐色粘質土層、XI・青灰色粘質土層へと続き基盤層に至る。A・B地区とも最高部ではV層まで削られて遺構、遺物はみられない。A区では4・5・6・7・8・b、c、dグリットの比較的平坦面でVb、c層が密にみられ、東、南へ傾斜するにつれて疎で薄くなる。旧石器の遺物もVb、c層の密な地区に多くみられる。

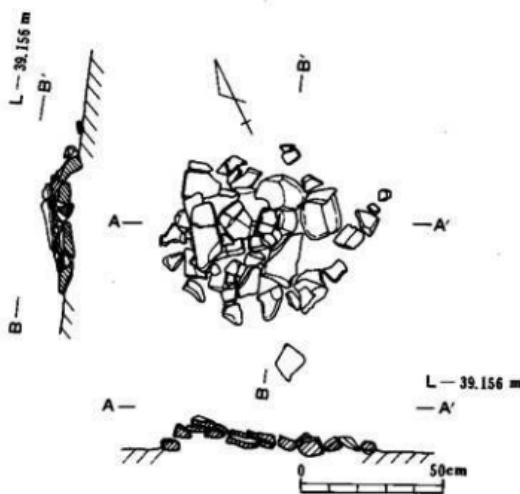


第6図 堂地西遺跡A地区
土層断面図（縮尺1/30）

旧石器時代

遺構

旧石器時代の遺構はA地区において集石遺構が6基検出されている。いずれも4・5・6・7-b・c・dグリッドのVb層中より検出され、規模は直径60cm~80cm程度である。集石内の石はほとんど焼礫と思われる。平偏な角礫が多く、ま



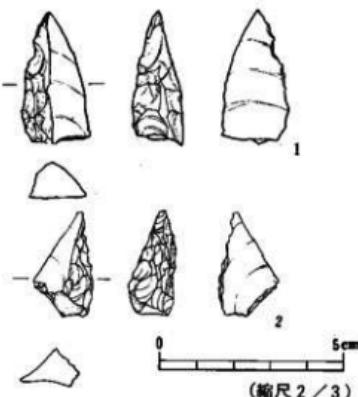
第7図 堂地西遺跡A地区集石遺構実測図（縮尺1/20）

破碎礫の割合も多い。これらの集石には、長方形プランに礫が構成され炉が想定されるタイプ、中央部が盛り上がるようなタイプ（第7図）などがあるが、前原西遺跡の10号集石のような掘り込みを持つタイプは存在しない。その他、焼礫が剥片等に混って散布している。

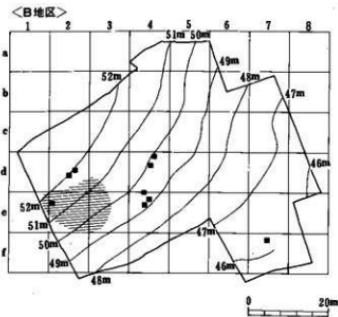
遺物（第8図1・2 第10図3・4）

堂地西遺跡ではA・B・C地区あわせて300点を超える数の剥片、ナイフ形石器、剥片尖頭器、石核、影器、搔器などが出土しているがほとんどがA地区の4・5・6・7-b・c・dグリッドに集中している。そのうち、剥片尖頭器8点、ナイフ形石器6点、影器3

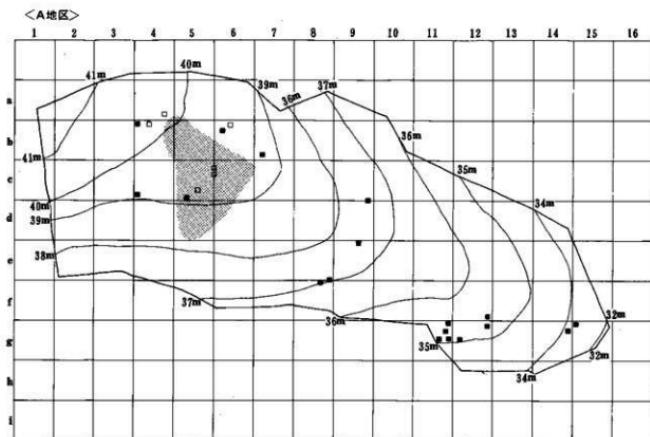
点、搔器1点などを数える。石材は硬質砂岩、第8図 堂地西遺跡A地区出土石器実測図(1)



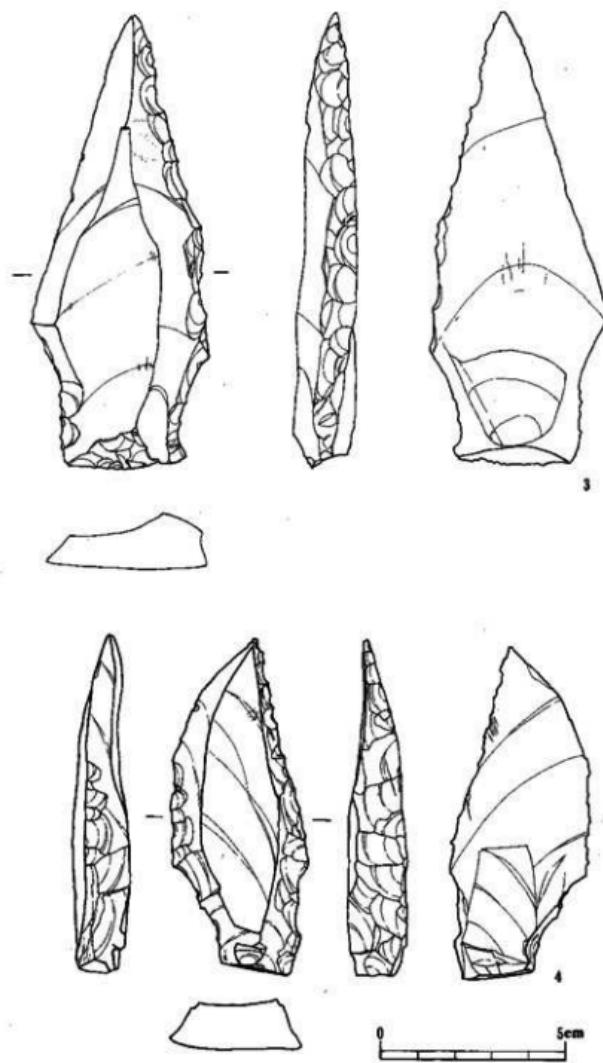
（縮尺2/3）



- ~ 鎌文時代の集石遺構
- ~ 旧石器時代の集石遺構
- ▨ ~ 旧石器時代遺物散布地域
- ～ ~ 縄文時代遺物集中地域



第9図 堂地西遺跡遺構分布図 (縮尺1/100)



第10図 堂地西遺跡A地区出土石器実測図(2) (縮尺2/3)

流紋岩、サスカイト、頁岩等がみられる。そのうち代表的なものを数点みることにする。

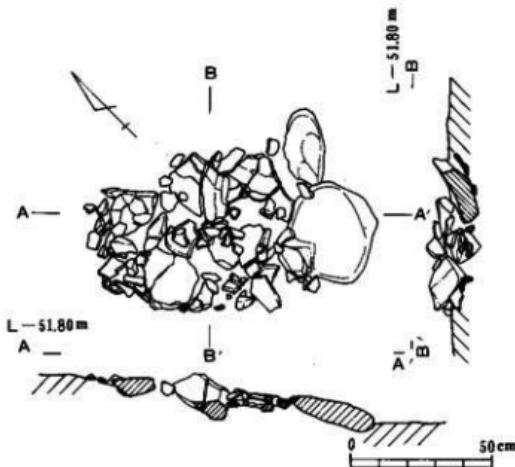
第8図1、2はナイフ形石器である。1は流紋岩石、2はサスカイト質のもので両者とも断面三角形の縦長剝片を素材にし、一側縁加工のナイフ形石器である。先端部の折れたものと思われる。第10図3・4は剝片尖頭器である。3は、器長12.1cmと当遺跡出土の尖頭器の中で最大級のもので硬質砂岩質の石材である。断面台形状の縦長剝片を素材とした剝片尖頭器で二次加工が一側縁の基部から先端部によよんでいる。4は、サスカイト質の石材で3同様断面台形状の縦長剝片を素材にし二側縁加工をしている。形状は半月形を呈している。この形状タイプの剝片尖頭器は2~3点みられる。

縄文時代

遺構

縄文時代の遺構はIV層中より検出されており、A区で18基、B区で9基の集石遺構が確認された。A区においては第9図の分布状況に見られるようにレベル差で3つのグループに分かれると考えられる。形態的に見ると大小様々であるが、掘り込みを頗る有するタイプは少ない。B区における分布状況も第9図で見られるようにA区と同様であると考えられる。B区には黒色土の掘り込みを持つタイプが数基存在する。これらは直径1m前後の円形を呈するが、掘り込み内に配石を有するタイプは存在しない。

A区、B区とも全体的に集石遺構を構成している礎は小さいものが多い。



第11図 堂地西遺跡B地区集石遺構実測図(縮尺1/20)

遺物（第12図）

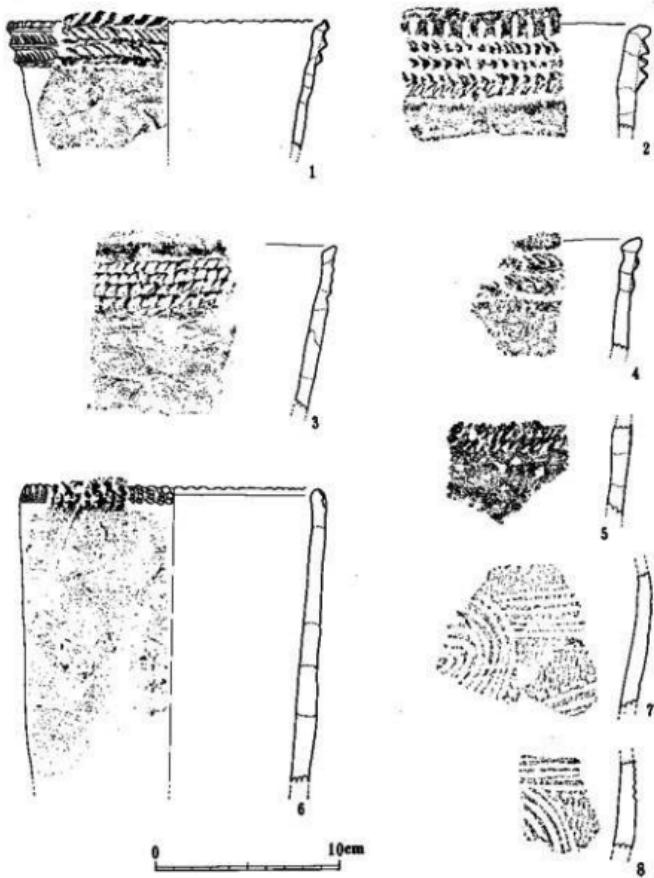
遺物は縄文土器、石斧、石鎌、磨石等が出土している。縄文土器の中で特徴的なものを第12図に示し若干の説明を加えて見たい。1～3は口唇部に刻み目を施し、その下部に2～3条の突帯を有し、その突帯に爪またはヘラ状工具で施文したものである。特に1、2は胎土焼成共に大変良好である。4、5は突帯は存在しないが、口縁部に爪またはヘラ状工具による2～4条の刺突文が施されている。4は胎土・焼成共に良好である。6は口唇部に刻み目を施し、その直下に貝殻等による刺突文が施され、胸部には貝殻条痕文を有する円筒土器である。胎土には石英・黒雲母を含む。色調は外面－暗褐色、内面－淡褐色を呈す。焼成は良好である。7、8は撚糸文を施した上に数条の沈線及び刺突文を施したものである。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に石英を含む。焼成は普通である。

その他、B区において、局部磨製石斧やスクレイバー等が出土している。

まとめ

これまでに宮崎県下で調査の行なわれた旧石器時代の遺跡としては、日之影町出羽洞窟、⁽¹⁾北方町岩上原遺跡、佐土原町船野遺跡があり、また表探で10箇所が出土地⁽²⁾となっている。今回の堂地西遺跡の旧石器時代層の調査は、層位的に石器をとらえられた点や集石遺構を伴う点など貴重なものとなった。層位的には第2オレンジ層直上層から出土しており、遺物が剥片尖頭器やナイフ形石器のセットである点から、細石刃とナイフ形石器を伴う船野遺跡よりも先行するものである。おそらく船野遺跡の文化層は堂地西遺跡でみられるVa層と対比できる。また、出土石器中から砾核や砾塊などのはっきりしたものがみられない点から別な場所での製作が考えられないこともない。また集石遺構6基を中心に石器類の散乱がみられるが集石別の石器のひろがりや集石の時期差については今後の研究によるところが大きい。

縄文時代の遺物は、A区とB区では様相を異にしている。すなわち、A区においては、第12図7、8のような塞ノ神式土器が出土しているのに対し、B区では第12図6のような貝殻文系の円筒土器、いわゆる前平式土器が出土している。これは、縄文時代の集石遺構の時期差を考える上で良好な資料になりうると考えられる。もう一つ注意すべき点はB区においてIV層下部より出土した土器群（第12図1～5）である。これは、南九州で縄文時代早期に一般的に見られる貝殻文系の土器とは系統が違うものであり、口縁部に爪またはヘラ状工具による施文がなされるものである。これには突帯を持つ物と持たないものがある。類例を求めるとすれば、鹿児島県志布志町鎌石橋遺跡・宮崎県串間市大平遺跡出土の土器に突帯部の施文



第12図 堂地西遺跡B地区出土土器実測図・拓影 (縮尺1/3)

が若干類似している。鎌石橋遺跡のものは桜島バミスの下層より出土しており、貝殻文系土器群より古い様相を持つ可能性が考えられる。この時期の宮崎平野部の空白を埋める新資料として注目されるものである。

(永友良典、日高孝治)

- 註 (1) 橋昌信「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢3』 1975
(2) 垂水公園、仲間原等で採集されている。
(3) 鹿児島県指宿市岩本遺跡出土の土器群に類似している。(指宿市教育委員会「南薩窯かん事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報 岩本遺跡」1978)
(4) 河口貞徳・峯崎幸清・上田耕「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古第16号』鹿児島考古学会昭和57年
(5) 同 上

3. 平畠遺跡（10号地遺跡）

（XV・XVI区）

調査区の設定と概要

1次調査（57年度）で対象とした約20,000m²の農学部校舎建設用地に引き続き、本年度は約8,000m²の学内道路敷、温室等付属施設の用地を対象として調査を実施することになった。XV区・XVI区は、学内道路敷部分で、XV区は南北、XVI区は東西に設定された道路敷部分を示している。

XV区では、縄文土器・土師器・布痕土器等の出土がみられたが、検出された遺構はすべて掘立柱建物跡であり、縄文時代の住居跡は検出されなかった。

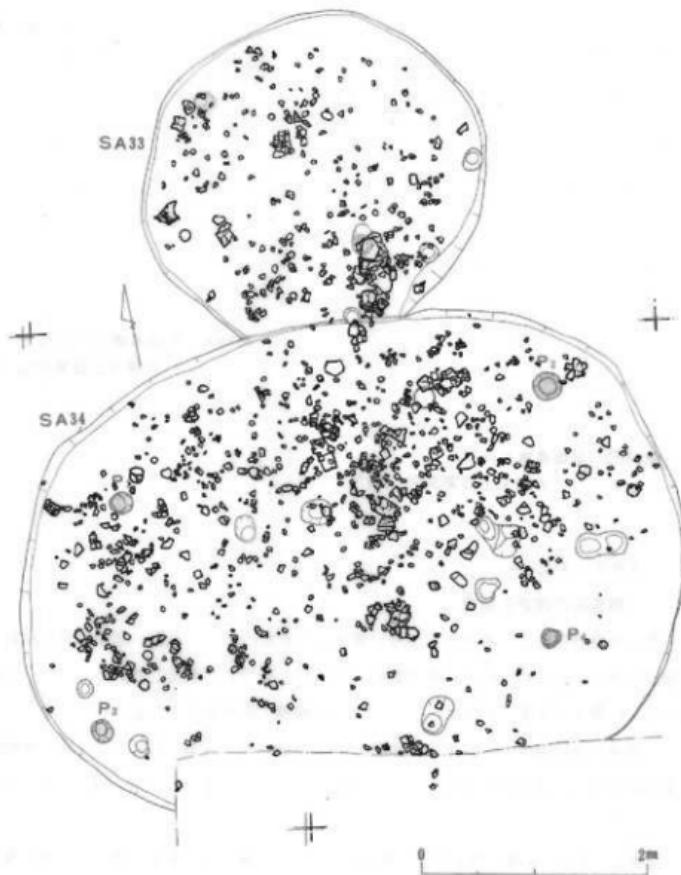
一方XVI区分からは、11基の縄文時代後・晩期の竪穴住居跡が検出され、1次調査の27基、さらに本年度のXIX～XXI区の5基を合わせ43基を数えるに至り、集落の構成を知る上でまたとない貴重な資料を提供するものとなった。

遺構

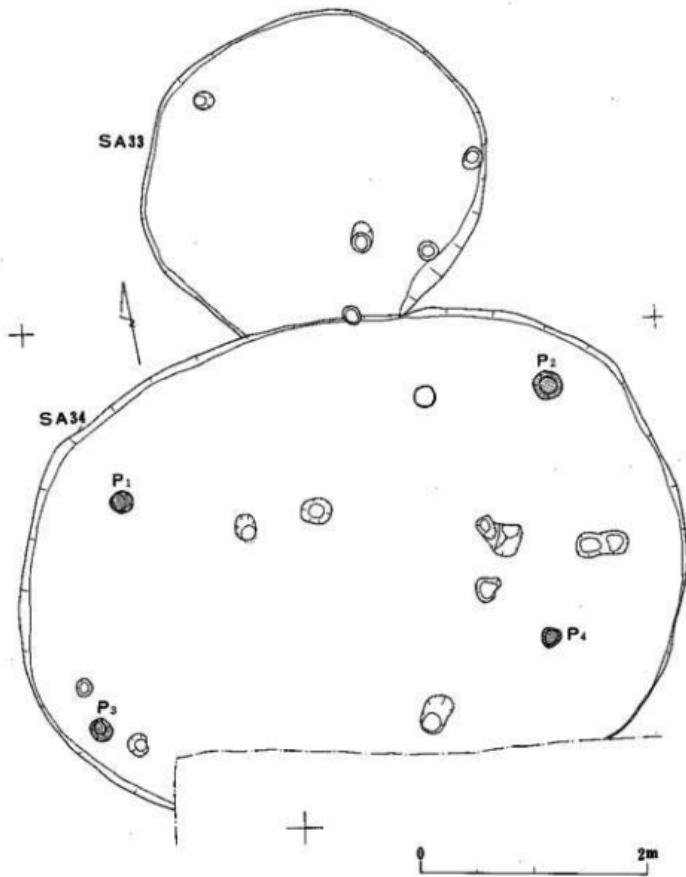
XV区で検出された掘立柱建物跡群の中で注目されるのは、ほぼ中央にみられた、北面に半間の庇をもつ桁行5間×梁行2間の掘立柱建物跡である。これまで、平畠遺跡の中では、1次調査で半間ないしは1間の庇をもつと思われる掘立柱建物跡があるが、いずれも形態を異にし、多様性を示している。

なお、1次調査では検出された煙道とカマドをもつ竪穴住居跡は、本年度の調査区内では確認されていない。

一方、XVI区に検出された縄文時代後・晩期の竪穴住居跡群の中で注目されるのは、S A 34（第13図）である。北縁辺部でS A 33と切り合っているが、S A 33と比べても、長軸5.9m短軸推定4mという規模の椭円形の竪穴住居跡は、2～4mの規模を通常とする遺跡の中では極めて目立つ存在となっている。また、S A 34では4本の主柱が存在したものと考えられ、家屋構造上も、他の2本柱を主とすると思われる竪穴住居跡と比べ注目されるであろう。



第13図 平烟遺跡 S A33・34竪穴住居跡実測図および遺物出土状態図（縮尺1/50）



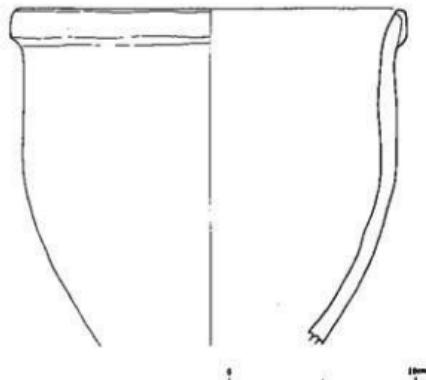
第13図 平畠遺跡 SA33・34堅穴住居跡実測図および遺物出土状態図（縮尺1/50）

遺物

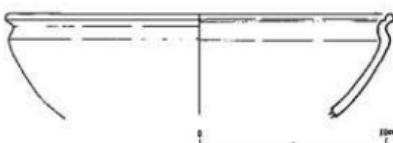
検出された縄文土器は、1次調査による成果と大きな差異はない。精製の浅鉢形土器の頻度は低く、粗製の深鉢形土器が大部分を占めている。

その他、自然遺物として炭化した種子が、竪穴住居跡・柱穴などの埋土から出土している。

(北郷泰道)



第14図 平畠遺跡 S A33出土
の縄文土器実測図 (縮尺1/3)



第15図 平畠遺跡 S A35出土
の縄文土器実測図 (縮尺1/3)

〈XVII区～XXVI区〉

調査区の設定と概要

農業部建設用地内に散在する関連付属施設予定地のうち、東西・南北学内道路敷以外の13施設10箇所（総計約2700m²）をXVII区～XXVI区と区分して調査した。このうち、台地中位面⁽¹⁾のⅡに位置するXVII～XX区は、ガラス室・実験棟・動物舎等が予定されている。また、一段高い西側の中位面Ⅰに位置するXXI区～XXVI区は、ガラス室・温室や管理棟・機械棟・農作業用道路などの予定地である。なお、XXV区については表土除去後、調査は来年度行うことになった。

XVII区～XX区は薄い表土の下に黄褐色のアカホヤ層があらわれ、縄文～土師器等の包含層は既に消滅していた。アカホヤ層面で縄文時代の竪穴住居跡4軒及び時期不明の溝状遺構等が検出されている。

XXII区～XXVI区では表土下は著しい削平がみられ、遺物の遺存状況も片寄りが観察された。豊穴住居跡は1軒、ほかに豊穴状の住居跡と思われる遺構が5基程みられた。XXII区・XXVI区では多数のピット群が検出されている。

包含層の状態

各区いずれも包含層の残りは悪かった。中位面IのXXII・XXVI区では、後世、特に掘立柱建物群が建てられた時期に大規模な土地削平が見られ、縄文時代の包含層はその攪乱を受け、さらに後の土地開墾等により縄文土器と土師器の混在する包含層が殆ど失われた状況を呈していた。ただ、部分的に豊穴住居跡状の落ち込みに縄文後晩期の遺物、多数のピットに土師器や陶器片が残されている。

中位面Iの縁辺部に位置するXXIV区は特殊な包含層の状態を示していた。この区の北半部は完全に削平されていたものの、南半部は表土下に夥しい量の遺物が確認されている。第16図は南半部の西壁土層断面図であるが、第IV層の黒褐色土（無遺物層）の緩傾斜面に沿って、第III層の遺物包含層が厚く形成されているのが見られる。この層の上部は土師器等の混入がみられたが、包含層に所々生じた小攪乱や落ち込みによるものと考えられる。包含層中の遺物の出土状態は、大小の土器片や石器類・石片類が全面に散乱して出土し、まとまって出土したものや完形に近い状態で出土したものは極めて少ない。精査したが遺構は検出できなかった。現在、遺物は整理中であり、概観した限りでは、縄文後期を中心にやや時期幅がみられる。

遺構

前年度調査区やⅢ・Ⅵ区と地形的に近接したⅨ・Ⅹ区では、円形プランの同規模の豊穴住居跡が4軒確認された。いずれも床面付近がわずかに残っているにすぎない。その外、Ⅷ～Ⅸ区で溝状遺構が確認されたが、遺物が伴なわず、埋土の状態から見て、かなり新しい時期の遺構と思われる。

高位部分である中位面Iからは、XXI区で縄文時代の豊穴住居跡が、また、XXIII・XXVI区では縄文土器や石器類のやや集中する豊穴住居跡状の浅い落ち込みが4箇所、そしてⅩI・XXVI区では多数のピット群が検出され、現在確認を急いでいるが、その中に掘立柱建物跡群が予想されている。

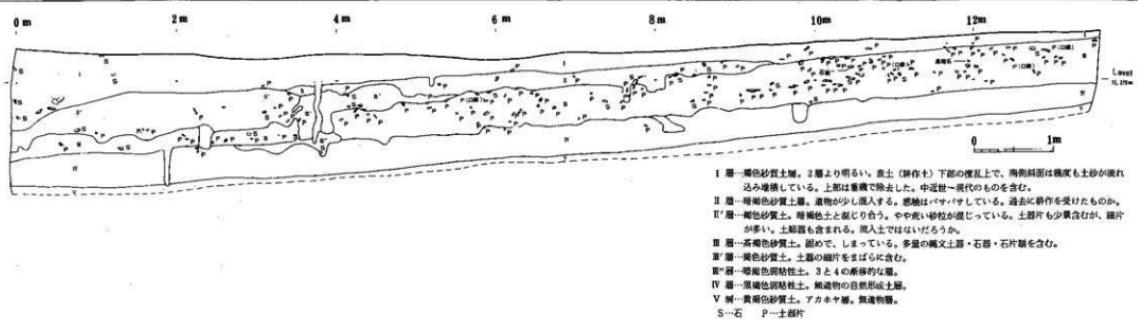
XXIV区における遺物の大量出土は、土器廃棄場としての区域を想定させる。しかし、発掘

面積が狭く限られたうえ、北半分を大きく削平されていたために、住居跡等の遺構を発見するに至らなかった。

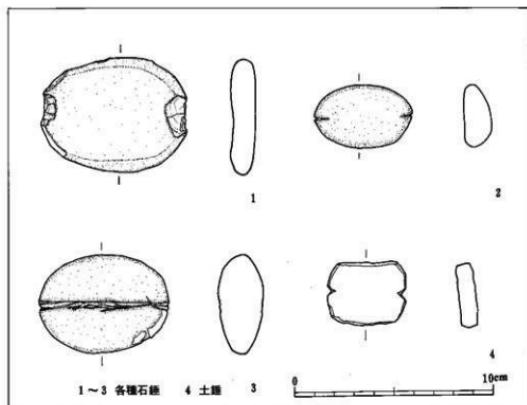
遺 物

全体的に遺構からの出土量は少ない。これに対してXXIV区は、狭い面積のうえ遺構が検出されなかったにもかかわらず、多量の遺物が出土している。その殆どは、現在まだ整理中であるが、様々な遺物が見られ、土器は縄文後期を中心に上層では土師器・陶磁器片も見られる。第19図1は、褐色の精製磨研の浅鉢形土器である。口縁部から胴部にかけてヘラ状器具で丁寧に磨かれているが、底部はナド調整である。2は淡暗褐色の精製磨研の深鉢形土器である。口縁部が肥厚し頸部でつまり、胴上部は強く張り出す。3は、赤褐色を呈した山形口縁の深鉢形土器で、内外面ともに貝殻条痕文が残る。口縁直下には、貝殻腹縁によると思われる刺突文帯がある。4、5は高坏形の土器である。4は黄褐色で坏部が欠損している。5は淡褐色で焼成がよく、脚部に長方形の透しがみられる。高坏形の土器はこの外にも2点出土しているが、坏部は欠損し全く残っていない。6は、小型の丹塗り深鉢形土器である。表面は茶褐色を呈しているが、その上に赤い顔料が塗られている。この顔料は口縁直下から最下部の突帯下にまで見られ、沈線内にも塗ってある。外器面は4条の突帯が巡り底部近くまでヘラミガキされる。口縁部にややくずれた三角文、その下には、最上部の突帯上面に弧文が見られる。同様に各突帯間にも沈線による文様構成が見られる。また、口唇部には竹管によると思われる刺突文が施されている。内器面は暗褐色で幅広のヘラミガキが見られ、内底部は粗いままミガキはない。内器面には塗色はない。全体に胎土はややもろい。口縁部推定⁽²⁾21.4cm、器高11.3cm、底部径3.2cmを測る。文様構成から縄文後期末のものと考えられる。これらは全て第Ⅲ層出土の遺物であるが、この外に無文の粗製深鉢形土器や注口土器等も出土している。また、土器片利用の土錘も多く見られる。土器の文様としては、貝殻腹縁文系が多いようである。

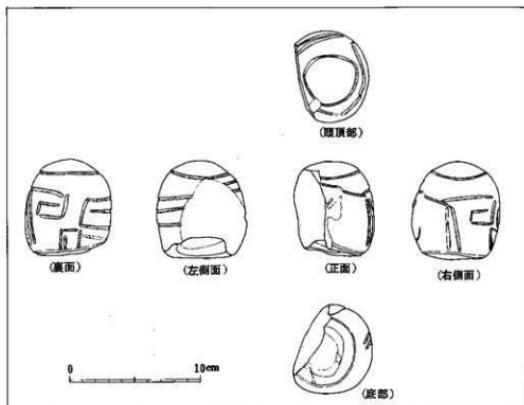
XXIV区は、土器の外にも多量の石片、自然礫、石器類が出土している。特に石錘の多さが目立っている。磨製と打製のものがあり、量的には打製の方が多い。これらは、長軸の両端を打ち欠いたもの（第17図1）、両端に切目を入れたもの（同図2）、切目が長軸を一周するもの（同図3）等があり、磨製の石錘は小型のものが多い。この外にも磨石、石皿、敲石、石斧、錐など様々な石器が見られるが、中でも第18図の岩偶は注目すべきものであった。これは、丹塗り深鉢形土器同様、第Ⅲ層の下部で両者間約5mをおいて出土している。半分近



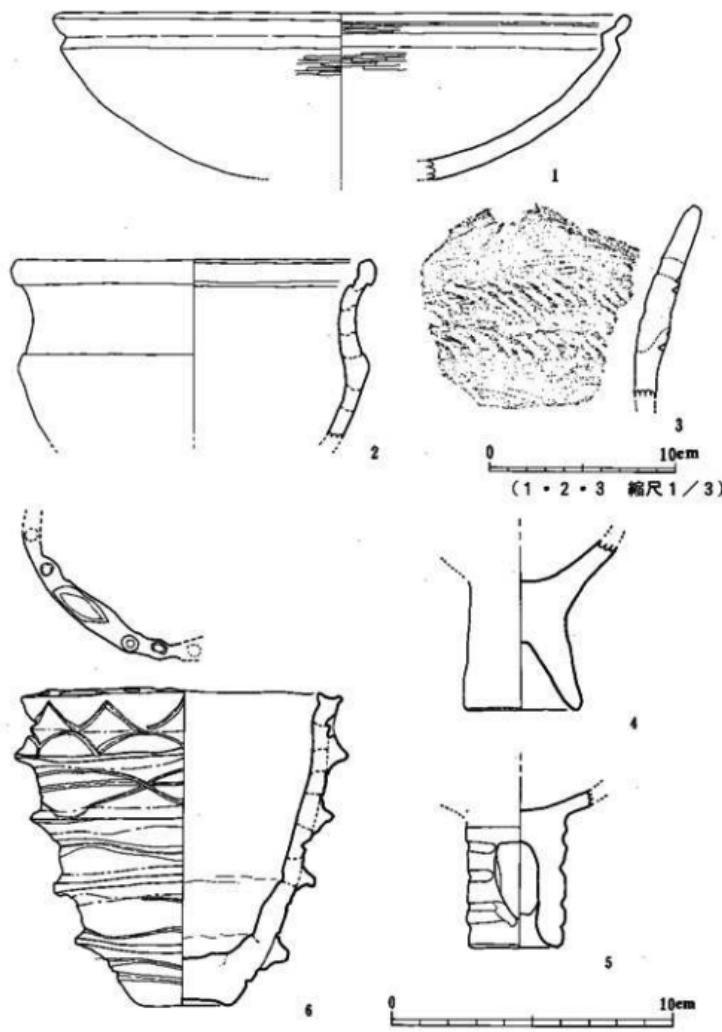
第16図 平畠遺跡XXIV区西壁土層断面図 (縮尺1/50)



第17図 平畠遺跡XXIV区出土遺物実測図 (縮尺1/2)



第18図 平畠遺跡XXIV区出土岩器偶実測図 (縮尺1/3)



第19図 平畠遺跡XXIV区出土縄文土器実測図・拓影(4・5・6 比例尺1/2)

くが欠損しているが、砂岩製と思われ、もろい。表面には沈線による文様が施され、下部の凹みを何かにのせて用いたようである。文様は縄文後期末に見られるもので、下部の座りから欠損部が顔面にあたると思われ、目鼻の存在は不明である。⁽³⁾

ま と め

今回、中位面Ⅱでは前年度に引き続き縄文後晩期の集落構成を知る資料を得た。直径3～4m前後の円形プランの住居跡が殆どを占める中で、S A 34の楕円形プランの大型住居跡は、特殊な性格が予想され、今後の遺物の整理が待たれる。また、中位面Ⅰにおける縄文土器は、中位面Ⅱのそれより貝殻文系土器が多いことが今回の発掘で観察され、これは、縄文後晩期集落の時期的な変遷を知る一助になると思われる。中位面ⅠのXXIV区において多量の土器片等とともに出土した岩偶や丹塗深鉢形土器は、県内では初めて出土した極めて珍しい遺物である。しかし、造構等何ら検出されなかつたため、周辺遺物も含めた検討を今後行いたい。さらにこれらを包含する第Ⅲ層の包含層の色調と土質が、前年度発掘区の黒色シルト質の包含層にくらべあまりに異なっていることも、中位面Ⅰ・Ⅱの形成とともに検討して行くべき課題である。

(菅付和樹)

註 (1) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅲ)』(宮崎県教育委員会 1982) の第2図

「周辺の地形分類」を参照。

(2)(3) 先日、九州産業大学の森貞次郎氏に来宮していただいた折に御教示願ったものである。

4. 堂地東遺跡（11号地遺跡）（第3次調査）

調査区の設定と概要

今年度の調査は、昭和55年度第1次調査の行われた地区の南側にあたる約20,000m²の畠地と昭和57年度第2次調査の行われた地区の南側、高圧線鉄塔周辺の約3,000m²の畠地を対象として行った。

第2次調査では全体を地形に合わせてⅠ区からⅩ区に地区設定を行っていたので、今回はそれに引き続いてⅪ区からⅩVII区に地区設定を行った。調査対象の畠地は西から東に延びるかまぼこ状の舌状台地を形成するが、その中央を東西に幅3mの農道が通っている。地区割は農道を境にして北側をⅪ・Ⅻ区に、南側をⅩIII・ⅩIV・ⅩV・ⅩVI区に分け、最東端の鉄塔周辺をⅩVII区とした。

アカホヤ層上面で検出できた遺構は、竪穴住居跡19軒、土塙14基、溝状遺構6本、掘立柱建物の柱穴とみられるビット約3,000個があげられる。また、アカホヤ層の下層からは縄文早期とみられる集石遺構5基を検出した。遺物は、後期旧石器時代の石器・剣片、縄文早期の条痕文土器、弥生の竪穴住居跡から弥生土器（壺・甕・高杯・杓子など）・鐵器・石鎌、土塙から弥生土器が出土している。Ⅺ区からⅩVII区にかけて検出した約3,000個のビットからはほとんど土器等は出土していないが、ⅩVII区のビットからは糸切り底の土師器が完形を含めて多数出土している。また、遺構は確認できなかったが、青磁片・陶器片を採集している。更に、「大永」の陰刻のある火輪をはじめ、五輪塔が数点発見され、鉄塔近くには「天正17年7月10日」銘の画像板碑が立てられている。

包含層の状態

基本層序は第1次・第2次調査と同様で、Ⅰ・耕作土、Ⅱ・黒色土層、Ⅲ・アカホヤ層、Ⅳ・黒褐色土層、Ⅴ・褐色土層、Ⅵ・ハードローム層、Ⅶ・第2オレンジ層、Ⅷ・白斑ローム層の順になっている。各区とも削平が著しく、第Ⅱ層の残っている所はみられなかった。Ⅺ・Ⅻ・ⅩIV・ⅩV・ⅩVI区は第Ⅲ層まで残っており、上面で竪穴住居跡等の遺構が検出されている。Ⅸ区はⅪ・Ⅻ区より一段高く、アカホヤ層中から土師器の出土はみたが、包含層としては確認できなかった。特にⅨ区は削平が著しく、褐色土層面まで達していた。ⅩIV・ⅩV区の南斜面には第Ⅲ層はすでなく、第Ⅳ層となっていたが、その中には多数の焼礫が散乱し、縄文早期の土器片も少量ではあるが、出土している。

（岩永哲夫）

遺構

集石造構

集石造構は、XII区で1基、XI区で4基の計5基検出されている。

1号集石造構は、長径120cm、短径100cm、深さ10cmと長径75cm、短径65cm、深さ10cmの楕円形プランの土壙を伴なう。北側の土壙には長さ20cm、幅10cmの角礫を20数個配置しており、南側の土壙には河原石を10数個配置している。両者とも石は火を受けた痕跡があり、土壤内の埋土には木炭粒を含む。

2号集石造構は、長径110cm、短径80cm、深さ10cmの楕円形プランの土壙を、5号集石造構は長径95cm、短径90cm、深さ5cmの五角形気味の楕円形プランの土壙を伴なっている。1号～5号集石造構はすべて土器を共伴していないが、縄文早期の集石造構と考えられる。

竪穴住居跡

竪穴式居跡は、過年度分を含めて19軒検出されており、その内訳は方形プラン（台形プラン）

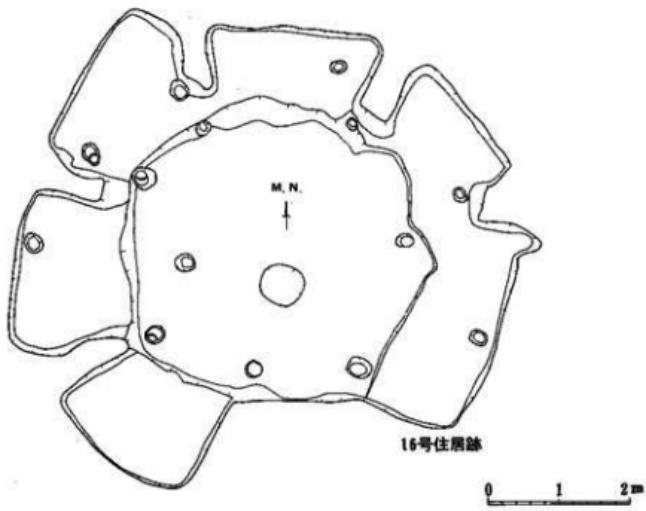
住居	形態プラン	規 模(m)	主柱穴	突山壁	ベッド	石 器	鐵 器	時 期	備 考
1号	方 形	4.8 × 4.8						中期後半	
2号	方 形	4.0 × 3.6	2			石 斧		中期後半	張り出し
3号	間仕切り(円形)	5.2 × 4.5		6	有			後期前半	
4号	方 形	4.2 × 3.4	4					〃	
5号	間仕切り(方形)	7.0 × 6.0	2	8			○	〃	円形浮文
6号	間仕切り(方形)	6.8 × 5.3		2			○	〃	丹塗・鋸齒文
7号	間仕切り(円形)	6.5 × 6.0	5	7				〃	丹塗
8号	間仕切り(円形)	10.2 × 9.7	8	6				〃	丹塗
9号	間仕切り(折衷)	4.3 × 4.1	2						
10号	間仕切り(円形)	7.2 × 7.0	6	4					
11号	台 形	5.5 × 4.5	4		有				
12号	間仕切り(方形)	6.1 × 6.0		8			○	後期前半	
13号	方 形	5.2 × 4.5							
14号	間仕切り(方形)	8.0 × 6.0		8	有		○	後期前半	
15号	間仕切り(折衷)	7.0 × 6.8	8	4		石 斧	○	〃	円形浮文
16号	間仕切り(円形)	7.2 × 6.8	6	7	有		○	〃	
17号	間仕切り(方形)	5.9 × 5.7	2	5	有				
18号	間仕切り(折衷)	6.7 × 6.2	4	8	有			後期前半	輕石製石製品
19号	間仕切り(方形)	4.2 × 3.7	4	3					

表1 堂地東遺跡弥生住居跡一覧表



第20図 堂地東遺跡遺構分布図 (縮尺1/400)

0 1 2 3 4 5 m



第21図 畜地東遺跡 5号・16号住居跡実測図 (縮尺 1/20)

ランを含む) 5軒、「日向型間仕切り住居」14軒である(表1)。

5号住居跡(第21図)はXII区で検出されており、長辺7.0m、短辺6.0mの方形プランを基調として8つの突出壁を有し、ベッド状遺構は有しない。主柱穴は2本で、主室の南部に炉穴を有する。遺物としては肩部に円形浮文を有する短頸壺・口縁部直下に一条の刻目突帯を有する甕・鉄器片・軽石が出土している。弥生後期初頭～前半に比定される。

16号住居跡(第21図)はXV区で検出されており、直径約7.2mの円形プランを基調として5つの突出壁を有し、ベッド状遺構を有する。主柱穴は7本で、主室の中央部に炉穴を有する。遺物としては口縁部直下に一条の刻目突帯を有する甕・鉄器片・軽石などが出土地していいる。弥生後期初頭～前半に比定される。

14軒の「日向型間仕切り住居」の基調プランは、方形プラン6軒、円形プラン5軒、折衷(不定形)プラン3軒である。

土 壤

XI区で6基、XIV区で8基の計14基検出された。

1号土壤(第21図)は、主軸長195cm、幅115cm、深さ35cmで、短辺の片方は弧を描いているが、他の片方は直線的で楕形プランを呈しており、二段掘り込みである。一段目の掘り込みの床面より上のレベルで口縁部に穿孔を有する甕・口縁部直下に一条の刻目突帯を有する甕・円形浮文を肩部に有する甕などが出土している。

10号土壤は、主軸長195cm、幅160cm、深さ40cmで、口縁部直下に一条の刻目突帯を有する甕と共に共伴して鉄鋸・磨製石鋸が出土している。

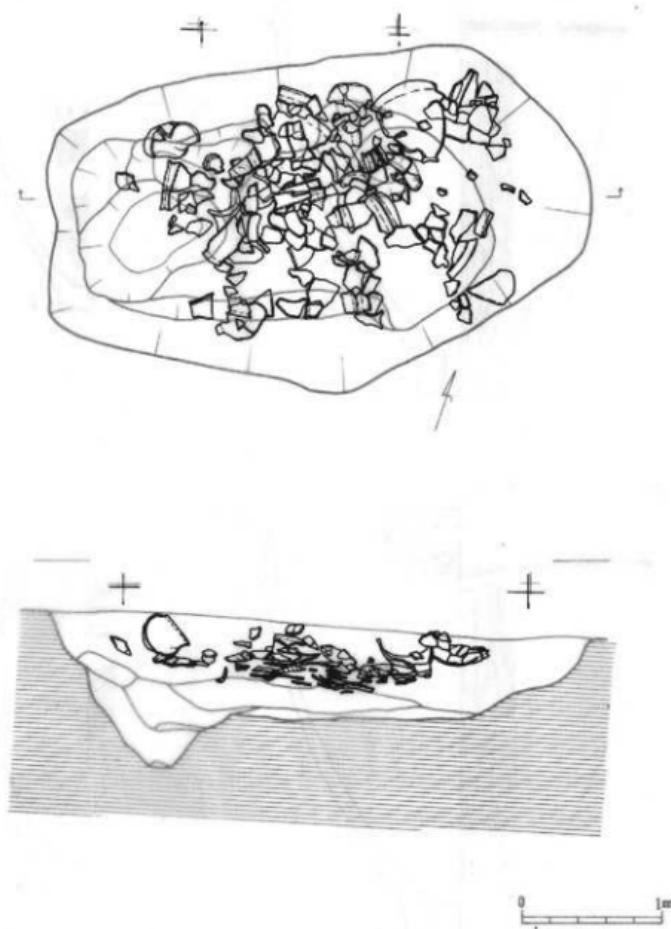
13号土壤は、16号住居跡の南南西へ100cmの位置にあり、長辺265cm、短辺250cm、深さ100cmで、円形プランを呈している。北東部に階段状の段が一段ある。埋土の中位で口縁部直下に一条の刻目突帯を有する甕片が出土している。16号住居跡の貯蔵穴の可能性が高いと考えられる。

土壤の時期は、口縁部直下に一条の刻目突帯を有する甕より竪穴住居跡と同じ弥生後期初頭～前半に比定される。

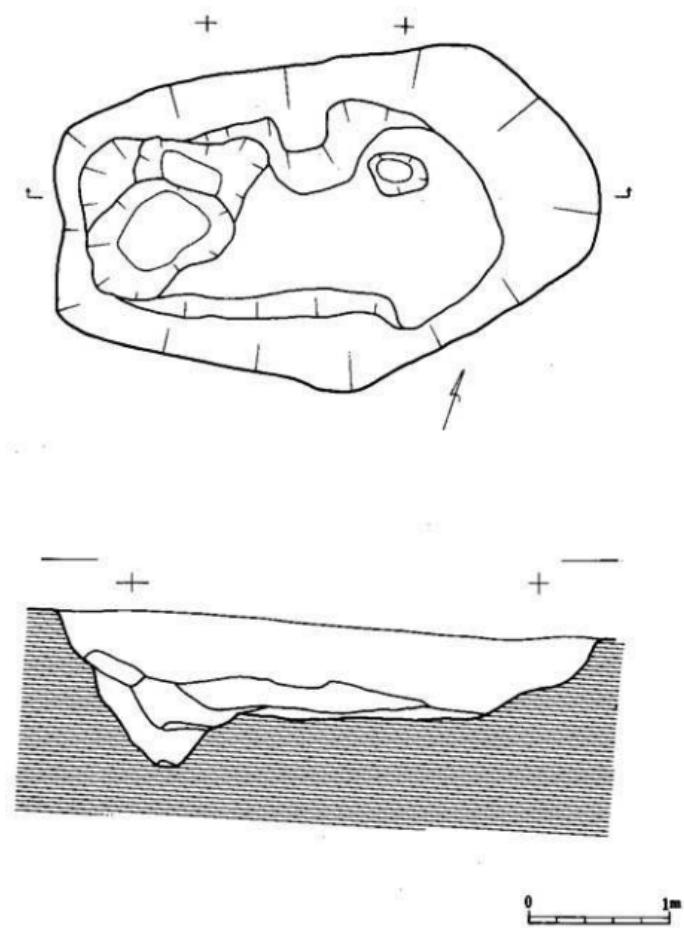
溝状遺構

XI～XV区に、南北に伸びる溝1、東西に伸びる溝2、溝1の東方に南北に伸びる溝3、XVI区の溝4がある。XVII区には南北に伸びる溝と東西に伸びる溝が各1本ある。

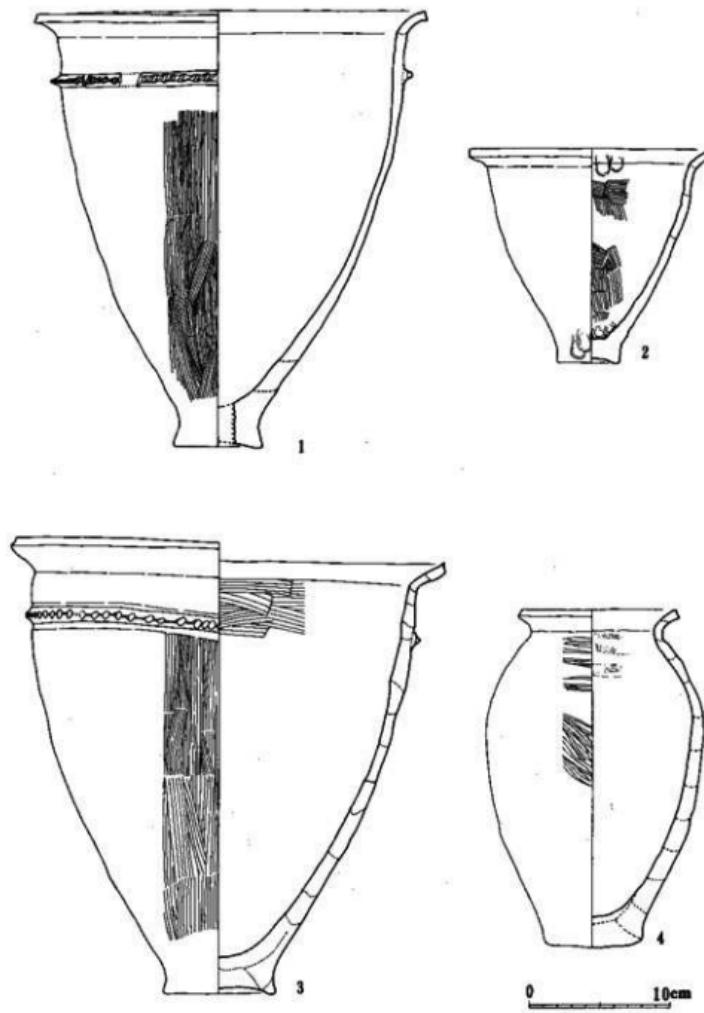
溝1は幅120cm、深さ50cm、溝2は幅80cm、深さ60cm、溝3は幅70cm、深さ15cmである。



第22図 堂地東遺跡1号土壤実測図（縮尺1/40）



第22図 堂地東遺跡1号土壤実測図（縮尺1/40）



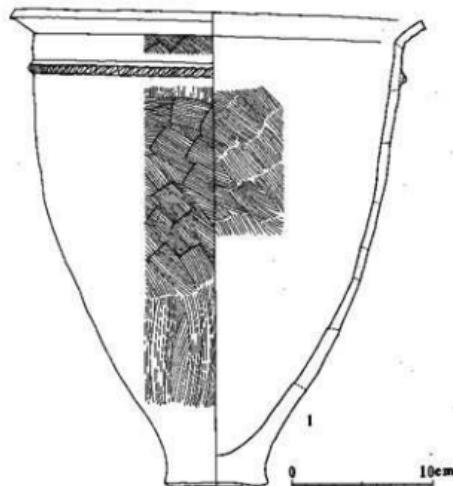
第23図 堂地東遺跡出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)
(1・2は5号住居跡、3は6号住居跡、4は12号住居跡出土)

溝はすべて埋土内に中近世の時期に推定される火山灰が堆積しており、住居跡群に伴なう溝はない。

遺物

第23図1・2は5号住居跡出土の弥生土器である。1は口径27.7cm、器高31.0cmのくの字口縁の甕で、口縁直下に一条の刻目突帯を有する。胴部最大径は刻目突帯の位置にあり、底部は上げ底である。口縁端部は凹気味で、下端をつまみあげる。刻目突帯は細目の刻目で、断面三角形は鋭い。内外面ともハケ目を施す。胎土には2mmの砂粒を多く含み、焼成はやや良好である。色調は淡赤褐色で、口縁部から底部までススが付着する。2は口径17.2cm、器高15.3cmのくの字口縁の甕で、口縁直下の突帯を有しない。胴部最大径は口縁直下にあり、底部は平底で上げ底である。内面はハケ目を施す。胎土には2~3mmの砂粒を多く含み、色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。

第23図3は6号住居跡出土の弥生土器である。口径30.3cm、器高32.2cmの1と同タイプの甕である。



第24図 堂地東遺跡出土遺物実測図(2) (縮尺1/4)
(7号住居跡出土)

第23図4は12号住居跡出土の弥生土器である。口径10.9cm、器高24.0cm、胴部最大径15.5cmの短頭壺で、くの字気味に口縁が外反し、端部は凹気味である。胴部最大径は中位より若干上にあり、底部は平底で厚い。外面はヘラ磨きを施す。胎土には1~2mmの砂粒を多く含み、焼成は良好で、淡褐色を呈する。

第24図1は7号住居跡出土の弥生土器である。口径29.0cm、器高34.0cmの第23図1・3と同タイプのくの字口縁の壺である。

その他、旧石器・縄文土器・土師器・須恵器・青磁・銅錢なども出土している。特に青磁は破片が多くかったが、遺構と共に伴するものは把握できなかった。

ま と め

当遺跡で検出された19軒の弥生住居を時期的にグルーピングすると二段階に分かれる。第1段階は、方形プランの1・2号住居の時期で、口縁部がほぼ直角に外反する大型壺の時期によって中期後半に比定される。第2段階は、間仕切りの機能を有する突出壁を複数有する「日向型間仕切り住居」の時期で、くの字口縁直下に一条の刻目突帯を有する壺によって後期前半(初頭も含む)⁽¹⁾に比定される。この土器群は山中悦雄氏編年の第V期に相当する。

「日向型間仕切り住居」を平面プラン・突出壁・ベッド状遺構の3要素によって分類する。第I類は円形プランを、第II類は長方形プランを、第III類は第I類と第II類の折衷形プランを基調とする。第IV類は、方形プランで突出壁を1、2個有する。第I~IV類は、ベッド状遺構の有無によって更にA・Bに分類される。「日向型間仕切り住居」の出現は、新田原遺跡の瀬戸内系の矢羽通り入り高坏に示される外的契機によってもたらされたものであり、中期と後期とを分ける要素の一つである。一方、基本的には前方後円墳の出現と共に消滅すると考えられる。この考え方方にたてば、第IA類は後期初頭~末(山中編年Va~Vb期)、第IB類は後期前半~末(山中編年Vb~Vc期)、第IIA・B類は後期前半(山中編年Vb~Vc期)、第III A・B類は後期前半~末(山中編年Vb~Vc)、第IVA類は後期初頭~前半(山中編年Va~Vb期)、第IVB類は後期初頭~末(山中編年Va~Vb期)に比定される。

当遺跡の弥生集落の単位の復原、弥生土器編年等は本報告書の中で行ないたいと思う。

(長津宗重)

註 (1) 山中悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案一素描」(『宮崎県総合博物館研究紀要』8) 1983

5. 熊野原遺跡（14号地遺跡）

熊野原遺跡は、56年度A地区、57年度B地区の発掘調査を行い弥生時代終末期の方形周溝状遺構や住居跡群を検出した。本年度は57年度調査区の北に隣接する部分 650 m⁽¹⁾と木花変電所の西側部分 14,000 m²（C地区）の調査を行った。

〈B地区〉（第2次調査）

調査区の設定と遺跡の概要

A、B両地区は東に開折谷、西に谷底低地をもつ舌状にのびた丘陵上に立地する。⁽²⁾その中で本年度調査区は谷底低地から約4mの比高差をもった舌状丘陵西側基部の端にあたる。

当地区は、昭和57年度の調査対象から外されていたが河川改修に伴ない東西、南北にそれぞれ數本のトレーニによる試掘調査を行った。その結果、住居址と思われる方形の黒色土の落ち込みを一部検出した。そこで表土除去後、面的発掘調査を行ない、数軒の住居跡が確認された。その後、河川改修のため西側の豚舎が移転することになったため、移転後その下の発掘調査も行い数軒の住居跡と柱穴を検出した。

今年度調査分では9軒の竪穴式住居跡を確認した。また昨年度分とあわせると住居跡18軒、土壙1基、掘立柱建物跡5棟となる。

包含層の状態

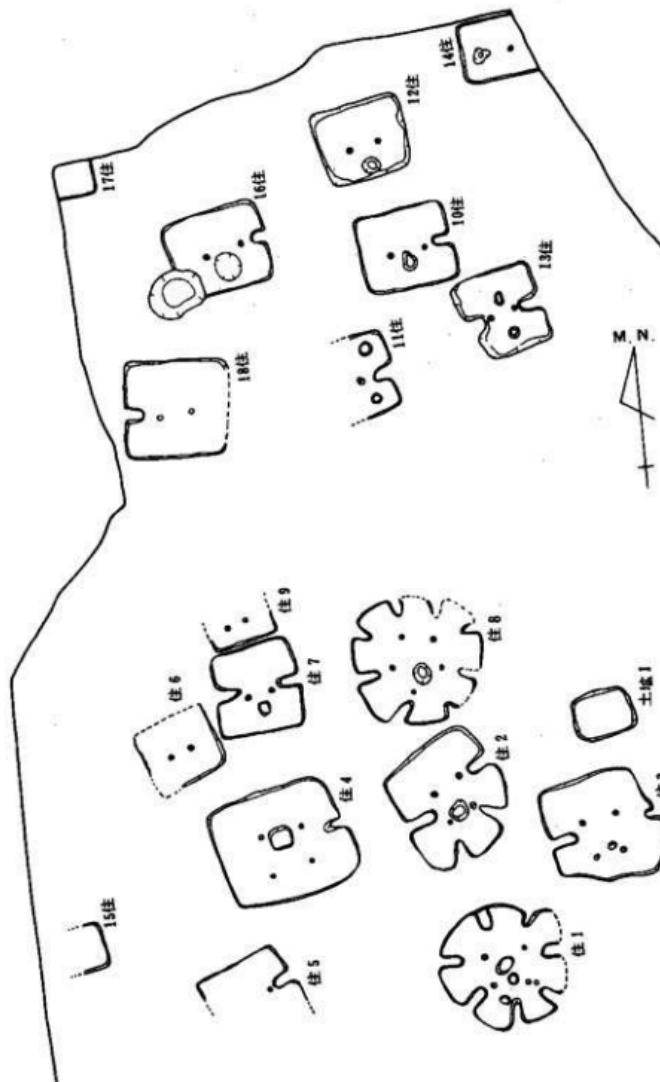
B地区的基本層序は、第1層（表土）、第2層（黒褐色土層）、第3層（アカホヤ層）、第4層（褐色土層）と続く。黒褐色土層、アカホヤ層とも北側端部に近づくにつれ堆積の厚さをましている。また南側ではすでにアカホヤ層は削平されておりすぐに褐色土が露出した。つまり遺跡は、南から北への緩斜面に営なまれていたと思われる。遺構はすべてアカホヤ層面での検出で第4層の褐色土まで掘り込まれている。⁽³⁾

遺構（第25図）

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡8軒である。昨年度に検出されたいわゆる“花弁状”的住居址は確認できなかった。すべて方形を基調としたもので、方形、内側に1箇所突出するもの、2箇所内側に突出するものの3形態がある。住居址の規模は5m×4.5mと昨年度の8号住居跡に比べるとやや小型である。柱穴もすべて2ヶ所で、突出壁のあるものはそれに対応してみられる。住居の規模に関係なく柱穴間の長さは約1.7mとほぼ一定であ

0 10 m

第25図 熊野原遺跡B地区遺構分布図

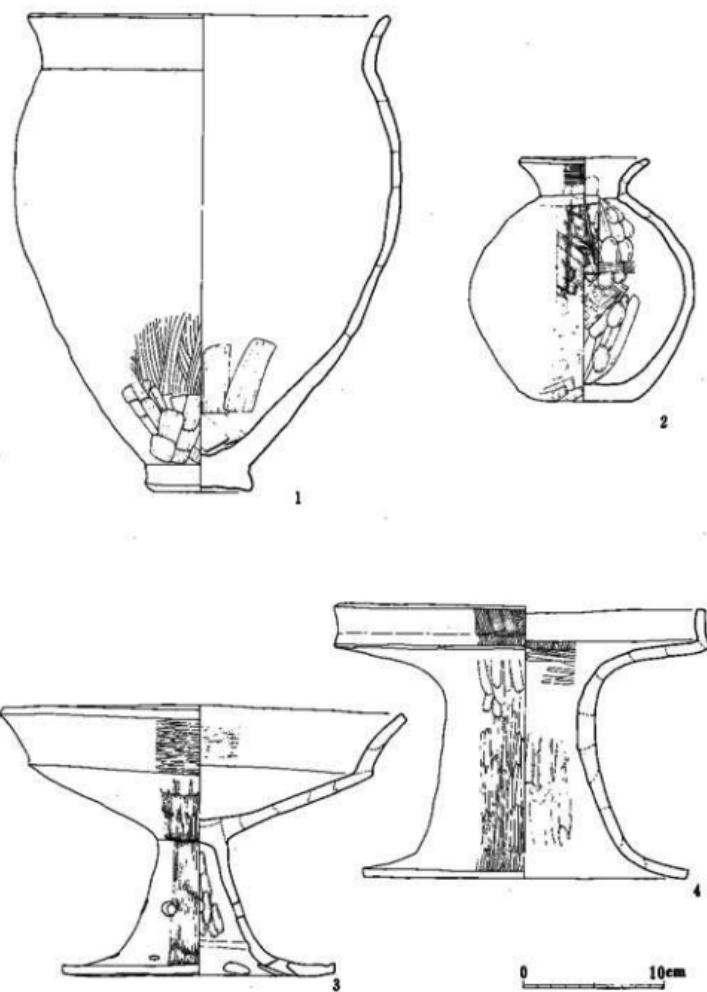


る。13号がやや短く1.4mである。深さも55~70cmと非常に深く上屋構造における主柱の役割を果していたことが窺える。住居周辺も探したが、すでにアカホヤ層まで削平されており検出はできなかった。また、13号では柱穴間に炭化物とともに焼土を確認した。他の住居跡では検出されなかった。10号、12号、13号、16号では柱穴間よりやや北側に黒色土の落ち込みがみられ、なかより高环、甕など出土し、いわゆる貯蔵穴として考えられる。炭化物等については検出できなかった。床面からの深さは20~30cmである。突出壁は、長軸に対する短軸にほとんど有し、昨年度調査分の4号、5号、3号、7号についても同じことがいえる。このように柱穴間の長さや深さ、突出壁の位置、貯蔵穴や焼土の場所からほぼ同一上屋構造が考えられる。また、長軸が東西、短軸が南北、柱穴が東西にならび、入口についても統一性があると思われる。南壁は貯蔵穴があり、突出壁に対しても柱があり入口として考えるには無理が多すぎる。そうすると突出壁がない短軸あるいは北壁が考えられる。

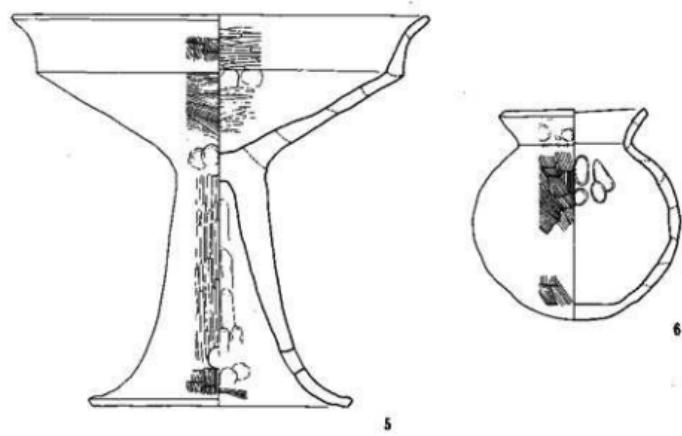
遺物（第26図、第27図）

遺物は、あまり耕作等による削平を受けなかったこととも関係し、12号住居跡、14号住居跡から多量の土器が出土した。特に12号住居跡からは約60個分の土器が確認されている。熊野原遺跡B地区の特徴として、土器を多量に出土する住居跡が1~2軒存在することや、各住居跡から2~5個分の高环が必ず出土していることがあげられる。なお、12号住居跡からは、ガラス小玉1個が出土している。

1~4は、12号住居跡出土である。1は口縁部が「く」字状に屈曲し先端近くで更にゆるく開く、胴部はつよく張らない。底部はやや上げ底気味の平底でしっかりしている。口縁部から胴部にかけて内外面とも横ナデ、脚部下半は粗いハケ目、口径20.8cm、最大径、28.2cmを測る。2は壺形土器で口縁部径9.2cm、器高17.3cmを測る。胴部上半にヘラによる2条の線刻をもつ、底部は平底を呈す。口縁部外面はハケ目、胴部はナデ、胴部下半から底部にかけて黒斑あり。3は高环形土器である。环接合部は明瞭な稜を有し口縁部は外反する。先端部は面取りされている。脚部は短く「ハ」字状に開き、円孔を有す。調整はヘラによる研磨を基本とし、脚内面には一部しづり痕がみられる。口径28.0cm、器高19.5cm。4の器台は口径28.2cm、器高20.3cmを測る。直立する口縁部外面は縱方向のハケ目、内面は横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラ研磨、内面はナデであるが未調整で粘土塊がのこる。5は13号住居跡出土の高环型土器である。环接合部は明瞭な段を有し口縁部は外反する。先端部は面取りされている。脚部は比較的長く、裾部は大きく開く。4つの円孔をもつ。环部外面は縦、横

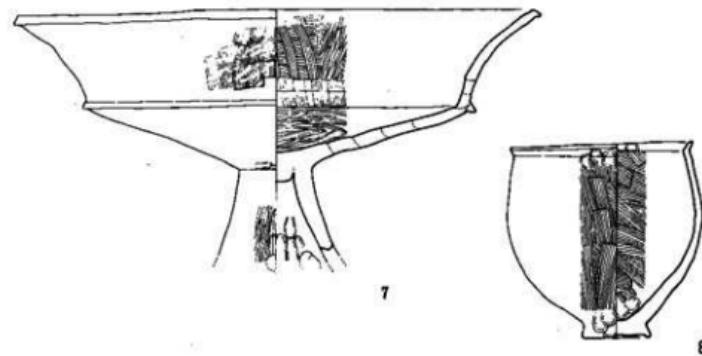


第26図 熊野原遺跡B地区出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)



5

6



7

8

0 10cm

第27図 熊野原遺跡B地区出土遺物実測図(2) (縮尺1/4)

のハケ、内面はヘラによる調整が施される。脚部外面はヘラ研磨、據部ではハケ目、内面にしづり痕をのこす。口径29.6cm、器高27.8cmを測る。6、7は14号住居跡出土である。6は丸底を有する壺形土器である。外面はハケによる調整、内面はナデ調整が施される。頸部付近から胸部にかけて一部黒斑あり、口径10.8cm、器高11.9cm、最大径15.0cmを測る。7は比較的大型の高壺である。壺接合部は突堤風の段を有し、縁部はやや直立気味に立ち上がりそれから大きく外反する。先端部は面取りされている。脚部は、口径に対してやや小さめで、「ハ」字状に開く據部をもつと思われる。4つの円孔をもち、壺部外面は縱方向のハケによる調整が施されている。口縁部下半はハケ、上半はヘラおよびハケによる調整、壺部下半の内面もヘラによる調整が施されている。脚部外面はヘラ研磨、内面にはしづり痕がのこる。口径37.6cmを測る。8は17号住居跡出土の壺形土器である。口縁部は「く」字状に外反するが短い。胸部あまり張らない。口縁部はナデ、胴部は外面が縦、内面が横方向のハケ目、底部付近が指による調整がそれぞれ施されている。口径17.3cm(推定)、器高14.1cmを測る。

まとめ

今回の調査では、方形(12号、14号)、突出壁を1つもつもの(10号、16号、17号)、突出壁を2つもつもの(13号)の3形態がある。柱穴の数はすべて2本である。これらは昨年度調査の住居群とは、「花弁状」住居が存在すること、柱穴の数など形態的にちかいがみられる。また遺物の出土量は12号、14号がもっとも多く5号と匹敵し、約60個体分の土器が廃棄された状態で検出された。なかでも12号は器台や長頸壺のほかにガラス製小玉も1個出土し住居群の族長的色彩が強い。B地区の特徴として堂地東遺跡の住居群に比べ小範囲に住居が密接していることや各住居跡からの高壺の出土量が多いことなどがあげられる。逆に堂地東遺跡では、円形あるいは不整円形、方形を基調とし、複数の突出壁をもつ住居がほとんどであるが、熊野原B地区では、1号、2号、3号、7号、8号、13号が複数の突出壁をもつだけである。出土遺物から堂地東遺跡の方がB地区より古く、住居形態によってある程度の時期変遷を追うことができるかもしれない。また、現在内側に突出した壁を間仕切りとする扱いには問題があると思われる。これらの形態が花弁状からの退化したものなのか、その影響下において出現したものは現在の段階では不明である。

以上、住居形態を中心に考えてきたが数々の問題を残している。これらは、今後土器を充

分に整理し、編年作業を進めていくなかで住居形態や変遷については考えていきたい。

(谷 口 武 範)

註 (1)『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(II) 1981

ここでは方形周溝墓とされているが、内部主体が明確でないことから方形周溝状遺構とした。なお、同様な遺構C地区でも確認されている。

(2)『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(II) 1982

(3)第2層(黒色土)で確認が困難のためアカホヤ層面での検出となったが、実際の掲込み面はかなり高かったと思われる。

(4)長津宗重氏の傳教示による

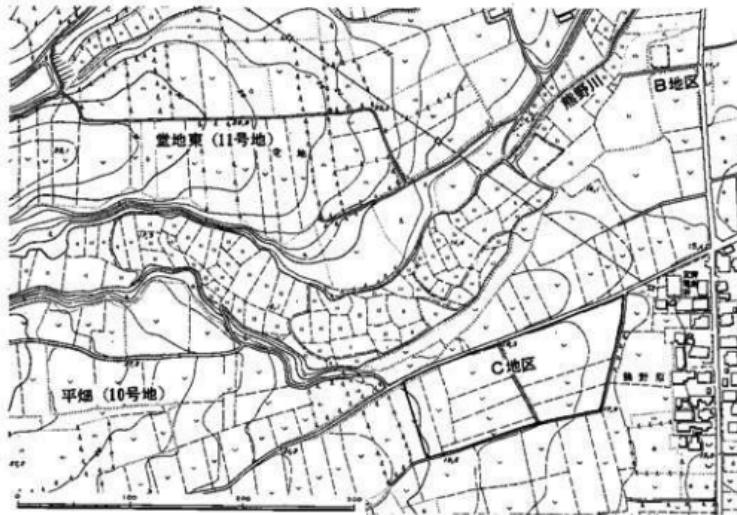
〈C 地区〉

調査区の設定と調査の概要

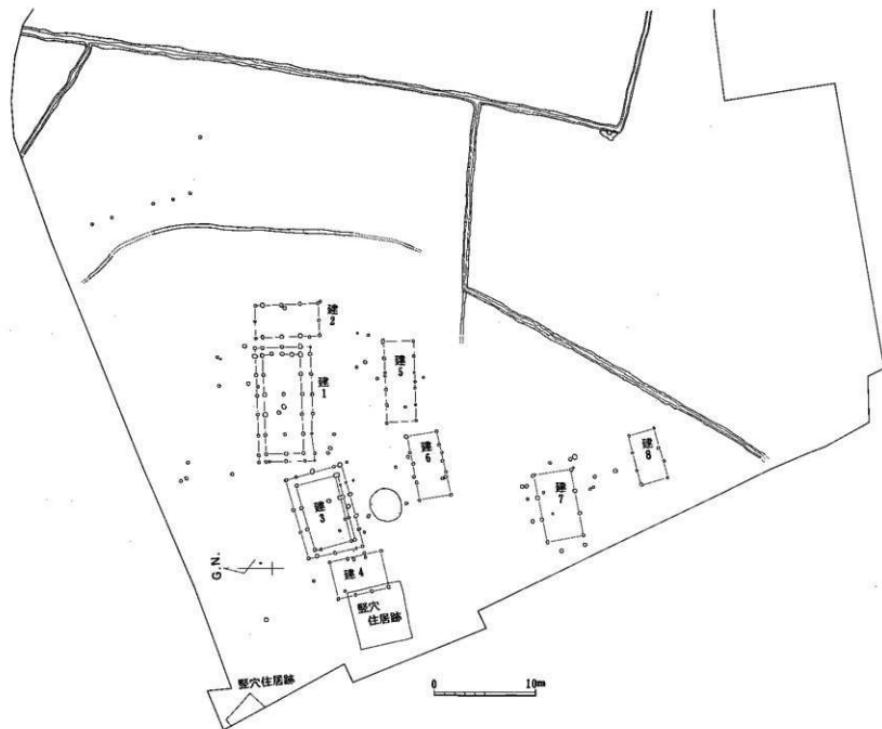
熊野原遺跡C地区は、B地区の南西約300m、熊野原台地が南へ入り込んだ北縁に位置する。北に堂地東遺跡を望み、眼下には小河川・熊野川が東流し、その周囲には谷底低地が開けている。

調査は、遺跡のほぼ中央部を南北に走る農道を境に便宜上東区と西区に分けて行う。当地は、調査前まで畑として利用され、西区の北西部の耕土はアカホヤが混入しており、アカホヤ層まで擾乱を受けていると考えられ、一方、西区南部及び東区の耕土は黒色土であり、アカホヤ層の上のにのる黒色土の残りは良いと考えられた。また、西区の西縁及び中央部の一部は、土取りにより50cm~1mほど削平されていた。西区では、昭和56年度の調査により堅穴住居跡らしい落ち込みが確認されていたので、調査は、削平を受けていた部分を除き、分布調査により遺物の散布が認められた全面を対象地とした。

東区の調査は、昭和58年4月5日から7月29日まで行う。耕土を重機で剝いだ後、黒色土面で包含層・遺構の検出に努めるが、東区東南部で縄文後期の貝殻文土器などの遺物が出土したのみで遺構等は検出されなかった。さらに、アカホヤ上面まで下がったところ、掘立柱建物、



第28図 熊野原遺跡C地区付近の地形



第29図 熊野原遺跡C地区東造構分布図（縮尺1／400）

竪穴住居跡及び東西あるいは南北に走る溝状遺構等が検出された。貝殻文土器に伴う遺構は、溝状遺構が北から東へ折れる付近で検出された不整形の土壤以外は検出されなかった。竪穴住居跡2軒の調査は、西区の竪穴住居跡の調査時に行うこととした。

西区の調査は、昭和59年1月23日から行う。表土を重機で剥いた後、黒色土層中で土器片が多く出土しているが、遺構等は確認できず、遺構の検出はアカホヤ面で行うこととした。その結果、竪穴住居跡、方形周溝状遺構、土壤、柱穴群及び南北あるいは東西に走る溝状遺構が検出された。西区と東区の境とした農道下からは、上幅1.5mほどの溝状遺構が検出されている。

包含層の状態

当地の基本層序は、耕土（第Ⅰ層）、黒色土（第Ⅱ層）、アカホヤ（第Ⅲ層）、小白斑を含む黒褐色土（第Ⅳ層）、褐色土（第Ⅴ層）となっている。西区北西部耕土下がすぐアカホヤ層であり、西区南部及び東区に行くに従い第Ⅱ層の黒色土は厚くなる。遺物は、黒色土中層（アカホヤ層から10数cm上）より縄文後期の貝殻文土器、5世紀前後を中心とした土器及び中世の土師器等が出土しているが、黒色土層を各時代の包含層に細分できる出土状況ではない。しかしながら、縄文土器の出土は東区南東隅、西区南部では4世紀代を中心とした土器など分布状況に若干の面的まとまりは見られた。

遺構

C地区で検出された遺構は、中世の掘立柱建物跡、溝状遺構及び5世紀前後を中心とした竪穴住居跡、土壤、方形周溝状遺構である。

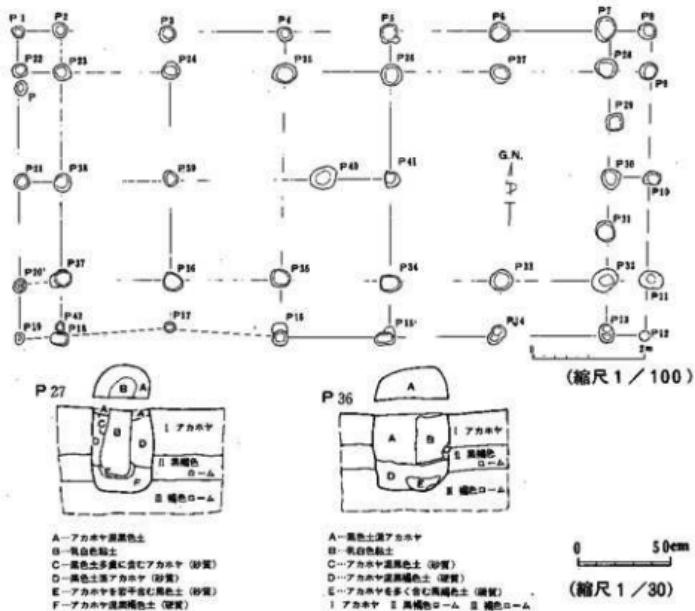
東区で検出された掘立柱建物は8棟あり、5間×2間、5間×1間、4間×2間、4間×1間が各1棟、3間×1間が4棟である。5間×1間の掘立柱建物1号、3間×1間の3号は4面に庇をもつ。掘立柱建物の主軸方位は、東西方向のものが1・2・5号、東北東～西南西方向のものが3・4・6・7・8号となっている。柱穴の埋土は、大半は黒色土あるいはアカホヤ混りの黒色である。1号の柱穴の中には、底面がつき固められ、円柱状の粘土もみられるなど特異な埋土のあり方を呈しているものもある。遺物は、3号の柱穴から糸切り底の土師器皿、瓦器製土鍋が出土している。

溝状遺構は、10数条検出されている。東区では5条検出され、連結したものが多い。溝状遺構の底レベルは全体的に若干北方向つまり谷底低地へ向って傾斜しているが、それほど顕

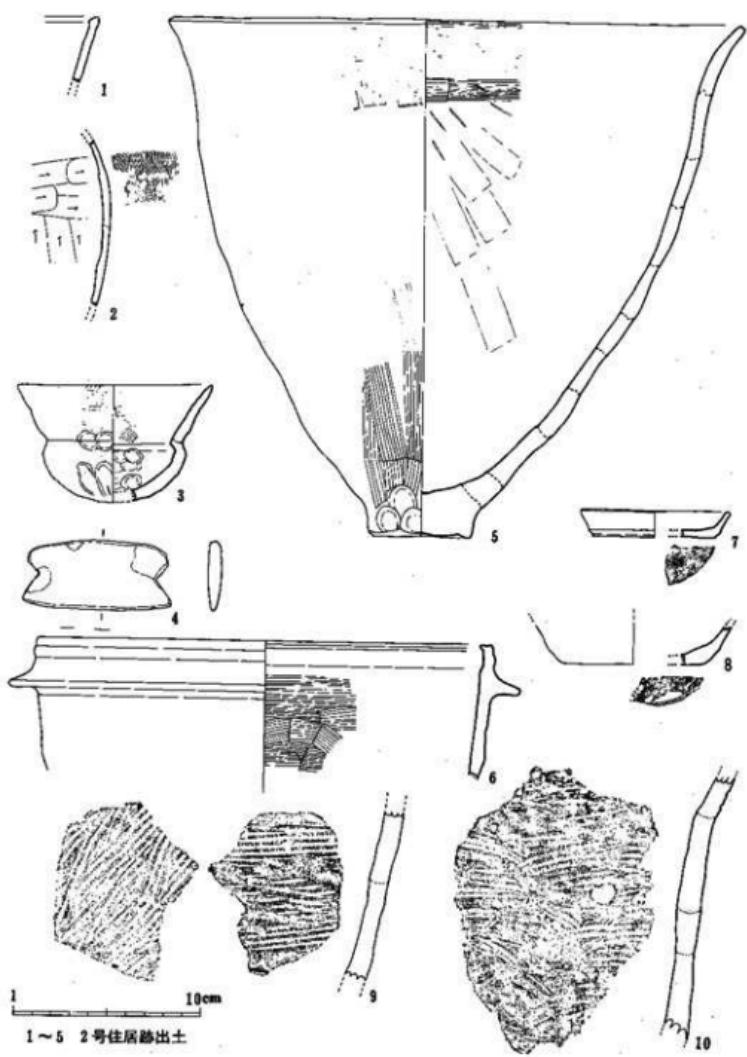
著なものではない。農道下で検出された溝状遺構の上幅は約1.5mあり、その東西で検出されている溝状遺構の上幅は50cm前後を測る。農道下の溝状遺構の西10m付近には柱穴群が検出されている。

掘立柱建物3号と6号のほぼ中間で径3.3mを測る円形プランを呈するすり鉢状の竪穴遺構が検出されている。埋土に炭化材がみられた。

竪穴住居跡は10数軒検出されている。平面プランは正方形あるいは長方形でB区で検出された突出部をもつものは確認されていない。規模は1辺が7mを越すものや5m前後のものなどがあり、竪穴の深さは、10cm前後のものから30cmを越すものもある。1号住居跡は、4.8m×3.5mの長方形プランを呈し、アカホヤ最下層を床面とし現深15cmである。柱穴は2ヶ所確認され、主軸はほぼ東西方向である。四周には幅5cm、深さ数cmの壁溝が巡り、壁溝内には径5cm前後の小ピットが数10cm間隔でみられた。2号住居跡は、約6.5m×6.4mを測る長方形プランを呈する。南辺には幅2.5m内への張り出し部がある。西辺は後世の貯蔵穴等によ



第30図 熊野原遺跡C地区掘立柱建物跡1号実測図



第31図 熊野原遺跡C地区出土遺物実測図（縮尺1/3）

り消滅しているが、残存する3辺では壁溝が巡り、小ピットも確認されている。竪穴は、黒褐色土上まで掘られており、床面は貼床となっている。深さは約15cmを測る。2号住居跡からは、石包丁、小型丸底壺、内面ヘラ削りの土器片などが出土している。

方形周溝状遺構は、竪穴住居跡3号と6号の間で1基検出されている。長辺8.5m、短辺7.2mを測り隅丸方形を呈する。溝上幅約1m、深さ50cm前後を測る。中央部において土壤等は検出されていない。溝内から土器が出土しているが、遺物にまとまりは見られず、完形土器等も出土していない。

遺 物

掘立柱建物に伴う遺物は、柱穴内やその周辺から土師器、瓦器製羽釜、須恵質土器小片が若干出土している。土師器は、いずれもヘラ切りの皿・壺である(第31図7・8)。第31図6図は瓦器製羽釜で復原口径24.4cmを測り、内面にハケ目がみられる。ツバの下部にはスグ付着している。

竪穴住居跡出土の遺物については、その調査が1月下旬着手であるため、現在、その詳細について把握していないので一部について述べたい。第31図1～5は2号住居跡出土遺物である。5は、復原口径31cm、器高27.8cmを測る變形土器である。口縁部はゆるやかに外反し、胴部はあまり張らず鉢形に近い器形である。底部はあげ底様平底で成形時の指頭痕が明瞭に残っている。1は、内厚する口縁部である。2は、變形土器の胴部片である。外面には細かい刷目があり、内面はヘラ削りされて厚さ5mm前後を測る薄手の土器である。胎土細砂粒を含み、暗紅色の細粒も含む。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。3は小型丸底壺である。口縁部は、直線的に外上方へ延び、体部はわずかに張りをもつ。口縁部はハケ調整のあとヨコナデされている。体部の調整は雑である。4は、両端に抉りのある石庖丁で両刃となっている。

貝殻文土器は、赤褐色ないし黒褐色を呈し、内外面に貝殻条紋文が見られる。10は頸部に貝殻腹縁刺突文が施文されている。貝殻文土器は、市来系土器で縄文後期後半のものと思われる。

ま と め

東区で検出された掘立柱建物8棟は、分布、主軸方位からA～Cの3群に分けられ、A群は1・2・5号、B群は3・4・6号、C群は7・8号とすることができます。A群の主軸方

位が東西方向で、B・C群は主軸方位が東北東～西南西方向となっている。A・B群は、その配置状況から四面庇の掘立柱建物を核として3棟が1単位として有機的関係を有するものと思われる。C群はB群と主軸方位がほぼ同じであることから同時期のものであろう。3号の柱穴からは、ヘラ切りの土師器皿・坏が出土していることから、掘立柱建物は平安末～鎌倉前半に比定できよう。ただA・B群の前後関係は不明である。

2号整穴住居跡の遺物は、その量は少ないが菱形土器、小型丸底壺、石庖丁等が出土して⁽²⁾いる。内厚する口縁部は、小片のためその器形は不明であるが、布留式の壺あるいは菱の口縁部に類似する。住居跡北西部で出土した内面ヘラ削りの胴部片は、胎土・手法等から搬入された土器である。

一方、在地の菱形土器は、鉢形に近い器形であり、底部は平底となっている。2号住居跡出土の遺物は、内厚する口縁部、内面ヘラ削りの胴部及び小型丸底壺等から布留式併行期のものと考えられる。

その他の住居跡出土の土器は、2号住居跡出土の菱形土器、小型丸底壺と類似するものであり、C地区の住居跡は、2号住居跡と同時期ないし前後する時期のものと思われる。C地区では、整穴住居跡の間に1基の方形周溝状造構があり、このような構成はA地区の例に類似している。

学園都市遺跡群では、弥生後期から古式土師器の時期の集落が堂地西（11号地）、熊野原B地区、20号地等で調査されており、これらの遺跡では内壁が突出する整穴住居跡が検出されている。C地区ではこの種の住居跡が前原西（19号地）同様検出されていないことは、注目されよう。

（面 高 哲 郎）

註 (1) 土師器の底部の切り離し手法がヘラ切りから糸切りへ転換するのは、当地域では鎌倉前半と考えられる。この点については、山内石塔群（23号地）の報告、土師器の項で詳細な検討が加えられている。

(2) 2号住居跡は、上部が解作のため削平を受けており、壁高15cmを残すのみであり、遺物は床面ないしそれより数cm上で出土していることから、同時期のものと考えられる。

参考文献

奈良県立橿原考古学研究所「発志院遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊

1980

宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ・Ⅲ」

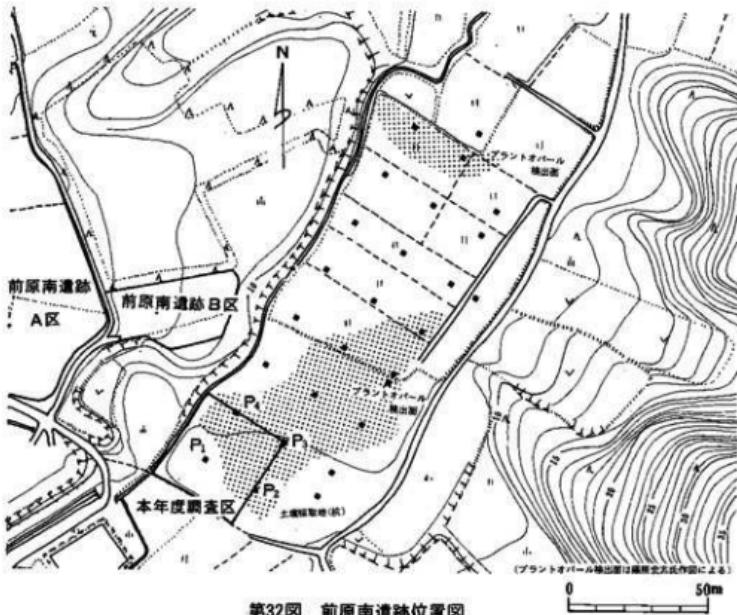
6. 前原南遺跡（19号地遺跡）（第2次調査）

調査区の設定と概要

今年度の調査は、昭和57年度の第1次調査が行なわれた地区の南側に隣接する水田面を対象に行った。この地区は南西から北東にのびる幅約80mの谷底地で、1次調査B区よりも約5mの低地に位置する。

調査にあたって、水田址の可能性が十分考えられたのでプラントオバール分析を行った。地形にあわせて20m間隔で27箇所から土壌を採取した。その結果、第32図のような範囲でプラントオバールが2～3層で検出されたので、そのうちの第1次調査区に隣接する南西側の1,200m²を調査区とした。

明確な遺構の検出はできなかったが、トレンチ断面から畦畔らしいプランがみられたが、平面的なひろがりは確認できなかった。遺物はプラントオバールの検出されなかった南西隅（P1杭周辺）に集中しており、弥生土器片、土師器片、青磁片、土鍾、石庵丁等がみられた。また、足跡も数ヶ所で確認できた。



第32図 前原南遺跡位置図

包含層の状態

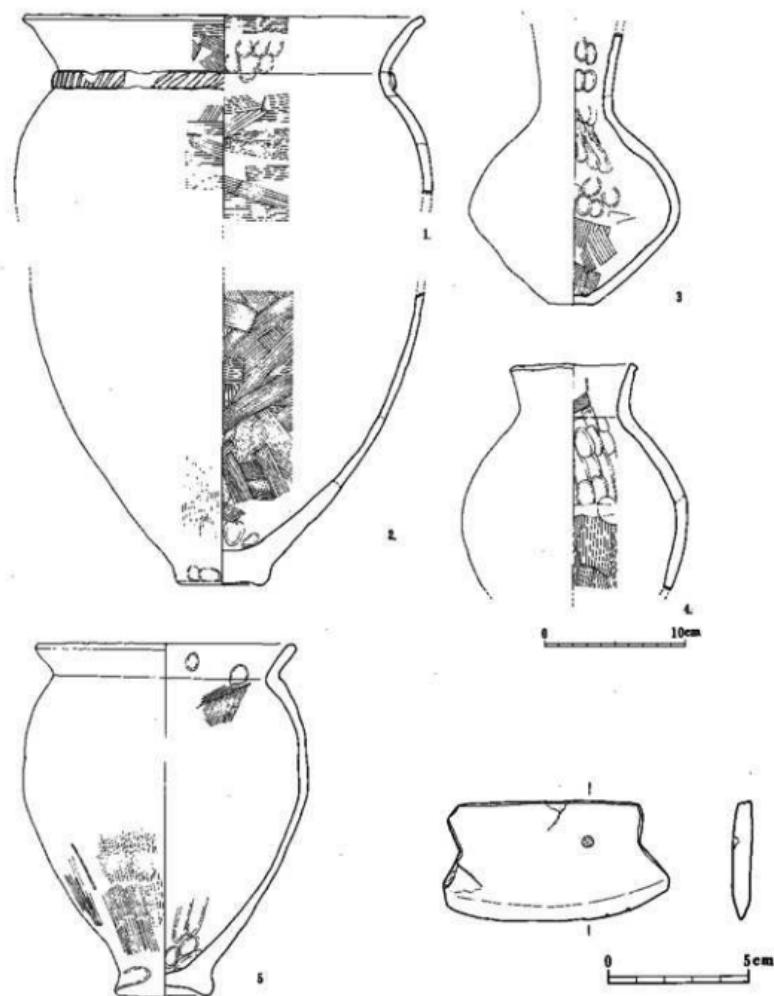
調査区の基本層序は、Ⅰ・現耕作土（約50cm）、Ⅱ・旧耕作土（約40cm）、Ⅲ・白色砂質土（約2cm）、Ⅳ・黑色土（約30cm）、Ⅴ・茶褐色土となっている。部分的にⅢ層とⅣ層の間に植物腐食土や灰白色粘土のみられるところもある。また、Ⅳ層の黑色土は純粋な黑色土ではなくⅣ層の茶褐色土の混りがみられる。南側に行くにつれてⅡ層の白色砂質土はみられなくなり、Ⅲ層の黑色土が急激に落ち込んでいる。

遺物や足跡はⅢ層の黑色土上部から出土している。同じⅢ層でも茶褐色土の混入量の多い下部層になると遺物はあまりみられなくなる。

遺 物（第33図1～6）

遺物はP1杭周辺に集中しており、第33図1～5のような完形品やそれに近いものは全てここから出土している。1は布痕整形のみられる絡繆突帯をもつ壺で、学園都市内の前原北⁽¹⁾遺跡（20号地）や前原南遺跡（19号地）の一次調査でもみられた「赤江式」の壺と思われる。それらのものと比べると若干胴部が張っており、最大径を肩部に持つのが特徴である。おそらく2は1の底部と思われる。3は土器の集中している所より東へ2m程の所から完形品の状態で出土した長頸壺である。このタイプの土器は、県内では弥生後期後半の時期にみら⁽²⁾壺だが、胴部の張りと頸部のくびれに鋭さがなくどちらもゆるやかなものとなる点が特徴的である。4、5は土器の集中箇所からの出土である。4は肩の張りではなく頸部のくびれも鈍⁽³⁾い壺である。5は弥生後期後半から終末にかけてみられる壺で胴部上部に最大径をもつ。

1～5の土器は、淡褐色をしており全体的に白っぽい感じがする。また、包含層に鉄分を含んでいるのか土器の表面が部分的に茶色に変色している。他に、青磁片、土師器片などもみられ、1次調査で多く出土した土錐と同じタイプのものが3点出土している。6は方形石庵丁でP1杭とP4杭の中間点あたりのⅢ層黒色土中から出土した。中程にかなりのえぐりを持つタイプのもので刀は鋸く穿孔途中の穴がみられる。⁽⁴⁾足跡はP1杭東側のプラントオバル検出面で確認された。Ⅲ層の黒色土にあり、Ⅱ層白色砂質土を埋土としている。足跡かどうか判断のつかないものまで含めて20ヶ所にみられる。足跡は長さ約20cm、幅約8cm。



第33図 前原南遺跡出土遺物実測図 1～5（縮尺1/4）6（縮尺1/2）

まとめ

1次調査区では弥生時代終末～古墳時代初頭から平安時代にかけての住居址が9軒検出されており、2次調査区はこの時期の水田址を十分期待して調査したが、結果的には確実な水田址や付属施設は確認できなかったが、わずかに畦畔らしい断面がみられたことは水田址の可能性を残すものである。遺物的には、長頸壺や「赤江」式の甕などから弥生時代後期後半ないし終末期を示しており、1次調査B区の9号住居址からも「赤江」式の甕が出土している点から9号住居址と対比できる。また、方形石庵丁も弥生時代後期から出現するもので時期的に合致する。しかし、方形石庵丁の場合、水田よりも畑作用としての用途が考えられており、成作途中と思われる点や使用された痕跡もさほどみられない点は問題が残る。

また、遺物を含むⅢ層の黒色土が上から流れ込んだ可能性も遺物の出土状況から考えられる。さらに、1次調査区と2次調査区とにはさまれた地区は、現在かなり泥地化しており土取りと思われ、2次調査区への客土も十分に考えられる。

以上のように、同一層（Ⅲ層）での畦畔の断面、足跡や出土した遺物の点から弥生時代後期後半以降の水田址の可能性も多少考えられるが、それを確実にできる資料がない現状では、断言はできない。

（永友良典）

註 (1) 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅲ）」1982 宮崎県教育委員会

(2) 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅱ）」1981 宮崎県教育委員会

(3) 山中悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描一」（研究記要No.8）

1983 宮崎県総合博物館

(4) 註(3)による。

(5) 今年度調査の熊野原遺跡の弥生後期後半の住居址内からも同タイプの石庵丁を

出土している。

II、結語

—遺跡の環境と立地の歴史—

堂地西（9号地）遺跡の発掘調査は、本県においてはじめての本格的な旧石器時代遺跡の調査となった。これまで、学園都市遺跡群の中にあって、昭和56年度の試掘においても旧石器時代遺跡の存在の可能性は指摘され得たし、昭和57年度の前原西（16号地）遺跡の調査においても旧石器時代のものと思われる石器の出土も確認されてはいる。しかし、堂地西におけるように、広面積の対象地の中で、火山灰層を縦層とし、層位的に、縄文早期・草創期から旧石器時代遺物の追求がなされたことは、県内の発掘史においても一つの面期を成すものと評価されよう。

ここでは、新しい知見である旧石器時代遺跡の存在も含め、各時代・各時期における遺跡の立地と環境の変遷について記しておきたい。

旧石器時代の遺物包含層は、第1オレンジ（アカホヤ）層下のハードローム層に求められる。しかし、地形のうねりに対応して、成層される土層は、意外な程に複雑なものであり、地形の高低により、火山灰層の形成も微妙かつ極端な変化を見せており、地層形成のまだ安定していないかったと思われる旧石器時代において、地形の変化とそれに対応する成層の在り方はより一層複雑なものであったと考えられる。外山秀一氏の分類による地形からいえば、⁽¹⁾堂地西は中位面Ⅰに立地している。旧石器時代に属すると思われる尖頭器は、同じく中位面Ⅰ上に、堂地西と開析谷を挟み立地する堂地東（11号地）遺跡においても検出されている。

縄文時代に入ると、旧石器時代の様相と一変し、ことに集石遺構を伴ない、遺跡数が激増する。学園都市遺跡群の中で、下田畠（1号地）・小山尻東（2号地）・田上（3号地）・浦田（4号地）・入料（5号地）・赤坂（7号地）・堂地西・平畠（10号地）・堂地東・前原西・陣ノ内（18号地）・前原北（20号地）とほとんどの遺跡から集石遺構が確認されている。これらの立地は、中位面ⅠからⅡにまで亘り盛んな遺跡形成をみせている。こうしたアカホヤ火山灰層下の時代における遺跡形成は、集石遺構そのものが1回性のもので量産されるべき性格のものであることと、集団のたゆまぬ移動の結果、量的な盛行を示しているものと考えられる。しかし一方では、縄文早期土器の多様さに注目し、またアカホヤ以後の森・曾煙式土器の齊一性との対照から、早期と前期の区分をもつことに新東晃一氏の見解は立つが、そのような意味からいえば、人間集団そのものの人口の在り方も含めアカホヤ以前の活力にも着目しておく必要があろうと思う。このことの意味は、学園都市遺跡群の中で縄文

前期・中期の遺跡が全く確認されていない状況に間わってくるものと思われる。

縄文前期に属すると考えられる遺物は、わずかに入料・下田畠遺跡から曾畠系の土器が確認された以外、全く認められておらず、縄文中期に至っては皆無といってよい。再び学園都市の中に遺跡が営なまれるのは、縄文後期に入ってからであり、この間の無人ともいえる状態にアカホヤ火山灰が全く無関係とは言い切れまい。⁽²⁾ 火山灰層に厚く被われた土地に、人間の生活がどのように阻まれたかは、環境論的に整理しておく必要があろう。

縄文後期からの集落は、堂地東・熊野原では土器の出土のみを確認しているが、遺構としての検出は、平畠遺跡に留まる。

平畠は、中位面ⅠからⅡにかけての10ha以上の広がりをもつ大住居跡群である。現在までの成果も部分的なものに限られるが、住居跡群の立地は一応中位面ⅠとⅡに分けられる。そして、出土土器の傾向からみれば、中位面Ⅰにみられるのは後期貝殻文系土器が比較的多くみられ、中位面Ⅱにみられる一連の無文土器より古い様相を示している。

こうした西に森林の広がる丘陵地を背にし東南にひらけた、ゆるやかな傾斜をもつ平坦地に展開される平畠における縄文の営みは、晚期でも前半期までには終りを迎える。

弥生時代の最も早い遺跡は、学園都市の中でも東端の二方に分れる谷底低地に突き出した中位面Ⅱに立地する前原北遺跡に認められる。弥生中期には開始されたと思われる前原北は周囲を囲む谷底低地に水田を営み得る条件をもち立地している。前原北にやや遅れ、中期末～後期初頭に開始される堂地東遺跡、さらに遅れ後期後半に開始される熊野原遺跡は、いずれも、前原北の北側から延びる同一の谷底低地に面して立地している。

前原北では、その後古墳時代まで継続して集落が営なまれるのに対し、堂地東ではほぼ一時期で営みは終り、熊野原へと谷底低地を挟み立地が移動する。しかも、熊野原の中でも東側に集中する。やがて、熊野原での営みは古墳時代に入ると西方に移動し、前原北に対し、やや内陸に位置する堂地東・熊野原では、このように微妙な集落の移動が行なわれている。

ただし、前原北周辺においても、古墳時代に入るとその南方に位置する前原南（19号地）遺跡が開始されるし、プラントオパール分析が明らかにしたように、前原南の東に延びる谷底低地では古墳時代から中世までの間に確実に水田が開始されている。

弥生～古墳にかけて、決して激増するという訳でもなく、小さな単位の集落が、それでも確実に営なまれる背景には、経済力の問題があり、谷底低地での水田耕作が開始されたとしても、依然として背後に広がる火山灰地での畑作が主要な生産力となっていたことに要因があろうと思われる。（未完）

（北郷泰道）

註 (1) 外山秀一「学園都市遠跡群周辺の地形分類」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』

(Ⅲ) 宮崎県教育委員会 (1982年)

(2) 新東晃一氏の御教示による。新東氏にはアカホヤ火山灰をめぐり幾つかの論文があるが、
過日お話しをお伺いした際は、より積極的にアカホヤ火山灰のもたらした影響力の大き
さを指摘されていた。

III、付 編

住居跡出土の木材炭化物

大塚 誠

熊野原遺跡A地区（14号地遺跡A地区）2号住居跡、熊野原遺跡B地区4号住居跡、同遺跡8号住居跡および前原北遺跡（20号地遺跡A地区）建物1号の4住居跡より、住居構築材と考えられる木材の炭化物が出土した。当時は住居近くの森林から、住居構築用材として適当な木材を伐採して使用したと考えられるので、出土した木材炭化物の樹種を知ることにより、生活地域の自然環境、山林原野の林相などを想像する手がかりを得ることが出来ると考えた。

採取した木材炭化物は小さく破断されていたが、各木材炭化物について、出来るだけ正確に横断面（木口面）、接線断面（板目面）、半径断面（弦目面）を取り出し、反射型光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて、組織構造上の特徴を観察し、樹種の識別を行った。
(1),(2)

結果

1. 熊野原遺跡A地区（14号地遺跡A地区）2号住居跡

住居跡内の14個所より木材炭化物を採取し、組織構造の特徴を観察検討した結果、11個所から採取したものは同一樹種でクヌギ、2個所より採取したものはコナラ、1個所のものはカシ属の3樹種14個体であることを確めた。

2. 熊野原遺跡B地区（14号地遺跡B地区）4号住居跡

住居跡内の南北セクション内から2個所、北東区から2個所、北西区から1個所、南東区から3個所、南西区および西壁側各1個所の10個所から木材炭化物を採取し観察した結果、南北セクション内ではクヌギ、タブ、ハイノキの3樹種、北東区ではクリ、北西区ではコナラ、ハイノキ、南東区ではクヌギ、モッコク、南西区はクリ、南西区西壁側はコナラ、ハイノキで、4号住居跡より出土した木材炭化物はハイノキ4個体、クヌギ3個体、クリ3個体、コナラ2個体、モッコク2個体、タブ1個体の6樹種15個体を確認した。

3. 熊野原遺跡B地区（14号地遺跡B地区）8号住居跡

住居跡内の北西区3個所、南西区1個所より木材炭化物を採取し、観察した結果、クリ3個体、カシ属1個体の2樹種4個体であることを認めた。

4. 前原北遺跡A地区（20号地遺跡A地区）建物1号

建物内3個所の柱穴（No 1'、No 4'、No 4'）から柱材に使用したと想像される木材炭化物を

採取し、観察した結果、柱穴No 1'からカシ属、柱穴No 4 からはカシ属、イスノキ、柱穴No 4'からカシ属、タブの3樹種4個体であると認めた。

ま と め

熊野原遺跡A地区 2号住居跡、熊野原遺跡B地区 4号住居跡および8号住居跡、前原北遺跡A地区建物1の4住居跡から出土した木材炭化物の樹種識別を行った結果、表の通り、クヌギ、コナラ、カシ属、タブ、クリ、モッコク、イスノキ、ハイノキの広葉樹のみ8樹種38個体を確認した。

8樹種は宮崎県の海岸林から内陸面に向って分布する暖帯の常緑広葉樹で、当時の住居近くには現在の林相に見られるような、カシ類、シイ類、タブ、イスノキ、ヤツバキなど多くの常緑広葉樹を混生する天然の照葉樹林が形成されていたものと推察する。⁽³⁾

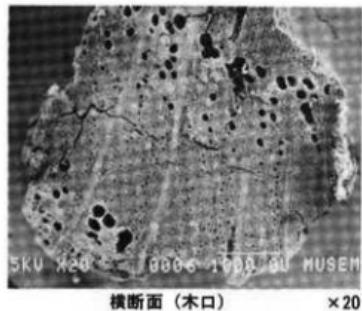
木材炭化物が広葉樹のみであることは、宮崎県内の住居遺跡の調査結果と同様である。今回の木材炭化物に髓を含んだものもあり、樹幹丸太のまゝ使用したものと想像される。

樹種	熊野原遺跡				計
	A地区 2号住居跡 個体	B地区 4号住居跡 個体	B地区 8号住居跡 個体	A地区 建物1 個体	
クヌギ <i>Quercus acutissima</i> Carr.	11	3			14
コナラ <i>Quercus serrata</i> Thunb.	2	2			4
カシ属 <i>Cyclobalanopsis</i> Oerst.	1		1	3	5
タブ <i>Machilus Thunbergii</i> Sieb. et Zucc.		1		1	2
クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.		3	3		6
モッコク <i>Termitroemia japonica</i> Thunb.		2			2
イスノキ <i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.				1	1
ハイノキ <i>Dicalix myrtaceus</i> Hara.		4			4
計	14	15	4	5	38

参考文献

- 1) 小林彌一、須藤彰司：木材識別カード 林業試験場 1960
- 2) 山林 鹿：朝鮮産木材の識別 要賀覚 1938
- 3) 穴戸元彦：樹木と環境保全 宮崎大学農学部森林経理学研究室
- 4) 宮崎県教育委員会：大蔵遺跡（1） 1974
- 5) 宮崎県教育委員会：大蔵遺跡（2） 1975
- 6) 延岡市教育委員会：野田町八出遺跡 1978
- 7) 高千穂町教育委員会：薄糸平遺跡 1978
- 8) 宮崎県教育委員会：上別府遺跡 1979
- 9) 都城市教育委員会：祝古遺跡 第1集 1981

クヌギ

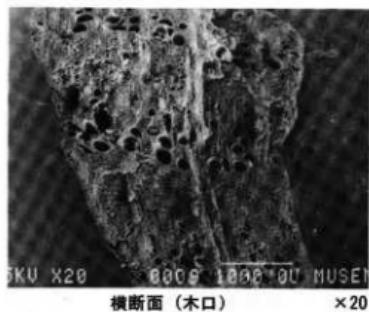


横断面（木口） ×20

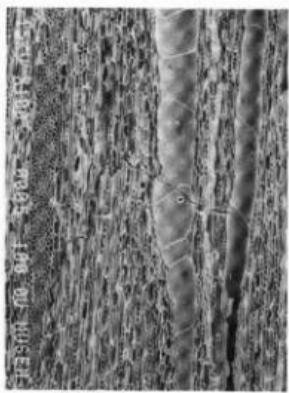


接線断面（板目） ×100

コナラ

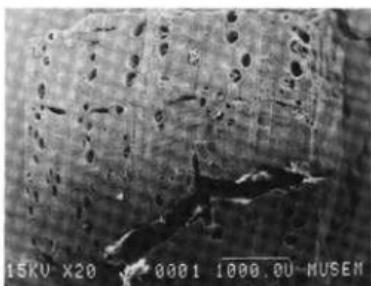


横断面（木口） ×20

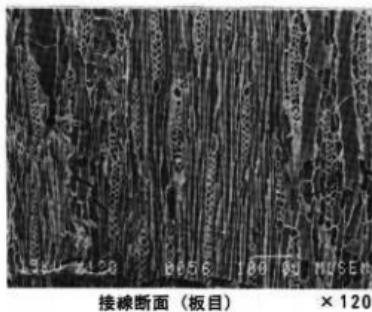


接線断面（板目） ×100

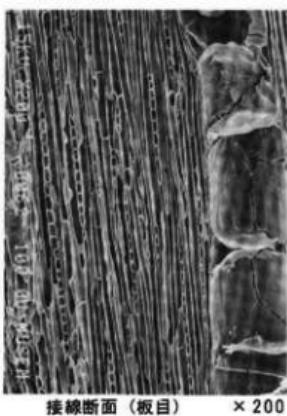
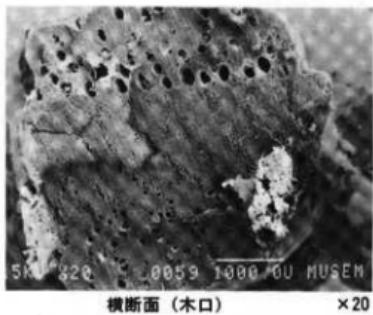
力 シ



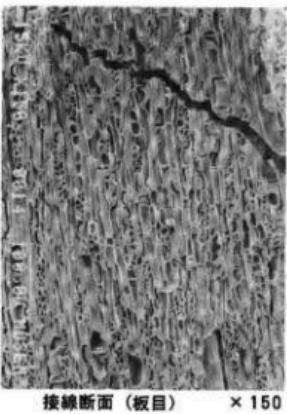
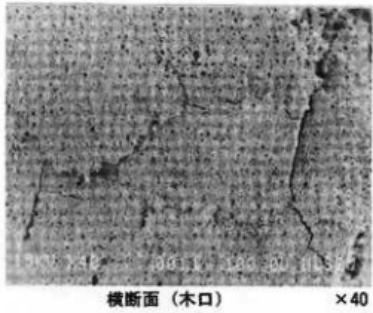
タ ブ



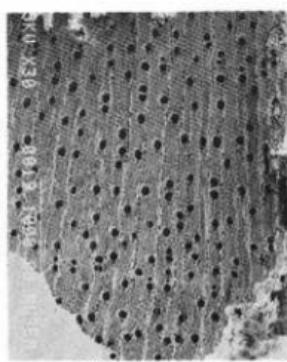
ク リ



イスノキ



モッコク



横断面（木口） ×30

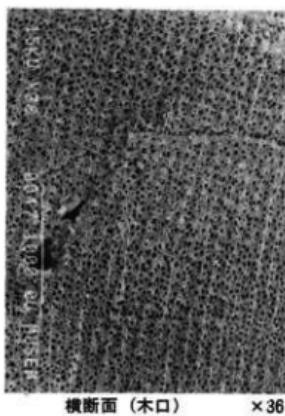


接線断面（板目） ×78

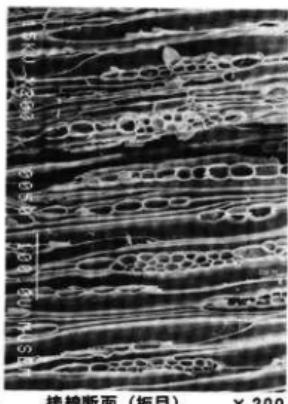


半径断面（糾目） ×66

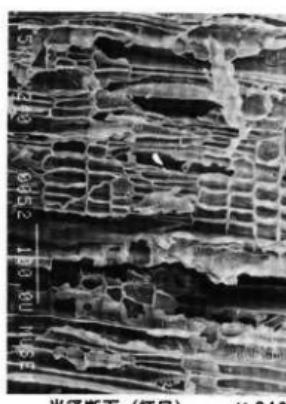
ハイノキ



横断面 (木口) ×36



接縫断面 (板目) ×200



半径断面 (径目) ×240

堂地西遺跡についての所感

橋 昌信

学園都市遺跡群の一つである堂地西遺跡では、先土器時代の300点を越える石器群が、集石（礫群）遺構と共に発見されている。

石器群の出土層位は、南九州における先土器（旧石器）時代での鍵層となる第2オレンヂ層（姶良・丹沢火山灰・通称AT）の直上の土層であり、ハードローム層に対比させることができるであろう。

石器群は、剝片・石核・剝片尖頭器・ナイフ形石器、それに数点の彫器・スクレイパーなどで構成されているものと考えられる。確認できた石器は、いずれも剝片石器であり、先土器時代の遺跡で普遍的に見られる礫核石器・礫塊石器については明確なものが出土していない。二次加工の剝片や使用痕の剝片（U-F）についても同様であるが、整理の段階での精査によって見つかるであろう。

当遺跡で、もっとも特徴的な石器として、剝片尖頭器をあげることができる。欠損品あるいは未製品と考えられるものを含めて、8点出土している。大きさは、最大長が約4.6cmの小形のものから、約12.1cmの大形のものまである。その調整加工は、基部の両側辺に舌状の加工が集中的に施されたものと、基部とさらに一側辺に沿っての加工が施されたものとに二大別できそうである。石器の素材は、断面三角形あるいは台形の厚味のある縦長剝片を用いている。石材はサスカイト質のものと硬砂岩質のものがめだつが、流紋岩質のものもみることができる。

ナイフ形石器と判断できる資料は6点出土している。1点をのぞくと、外はいずれも一部が欠損している。そのため、全体の大きさ・形態ならびにその調整加工などについて、明確に知ることができない。しかし、限られた資料から、縦長剝片を素材に用いた二側縁加工で、5cmを越る大形のものが主体を占めるものと予想される。石材については、流紋岩とサスカイトにほぼ限られそうである。

彫器については、その認定にやや難があるものを含めて、3点出土している。彫器は少なくわざか1点のみである。

今までのところ、宮崎県内で剝片尖頭器が出土している遺跡は7ヶ所ほど存在するようである。いずれも表面採集のため、出土層位や共伴石器などは不明という状況である。

ところが堂地西遺跡では、それらが明らかであり、しかも8点というまとまった数が出土しているのである。今後、宮崎県内はもとより、大分・鹿児島を含めた東九州地域での剝片尖頭

器を考察・究明する上で重要視される。

いっぽう、ナイフ形石器については、県内で20数遺跡が知られている。佐土原町の船野遺跡をのぞくと、剝片尖頭器と同様に出土層位や石器組成などについては不明である。実体がほぼ明らかにされている船野遺跡は、石器群の出土層位がソフトロームからハードロームの上面にかけてであり、堂地西遺跡よりも上位の層位である。しかも船野遺跡のナイフ形石器は、小形で幾何形をしたものが主体を占めており、堂地西遺跡の大形のものとは異なっている。さらに共伴石器でも細石刃を中心で、剝片尖頭器は見られない。このように、堂地西遺跡はすべての面で、船野遺跡に先行する様相が認められる。宮崎県内のナイフ形石器文化の新たな展開が、堂地西遺跡で開始されたと見なされ、今後の調査およびその整理結果に大きな期待が寄せられる。

1983年2月20日

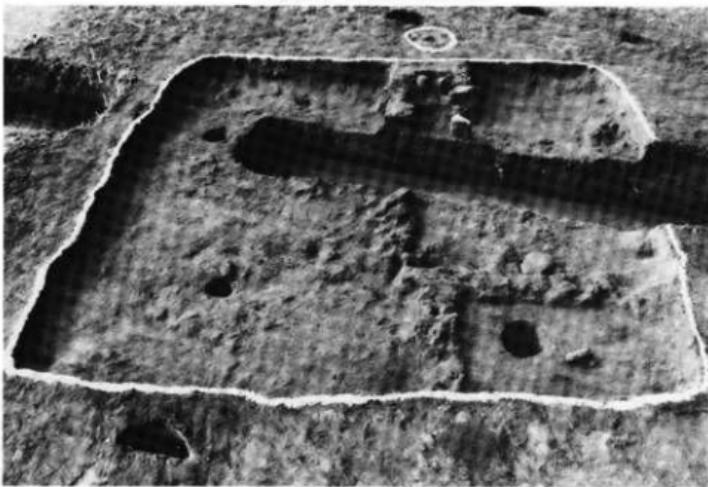
図 版

図版 1

浦田遺跡
(1)



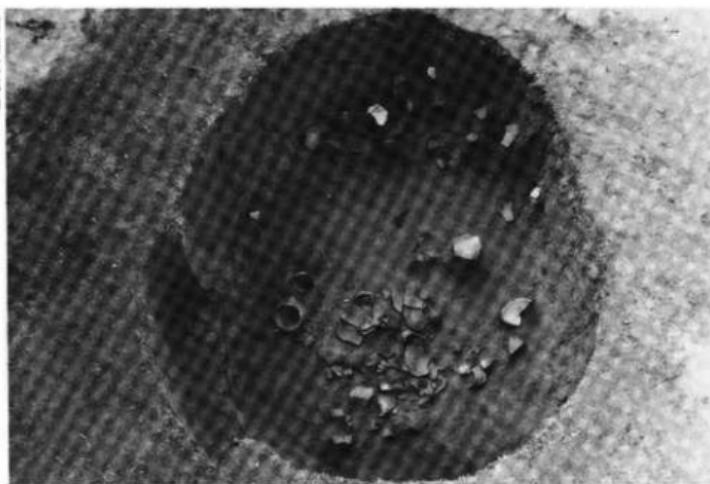
遺跡遠景（堂地西遺跡より）



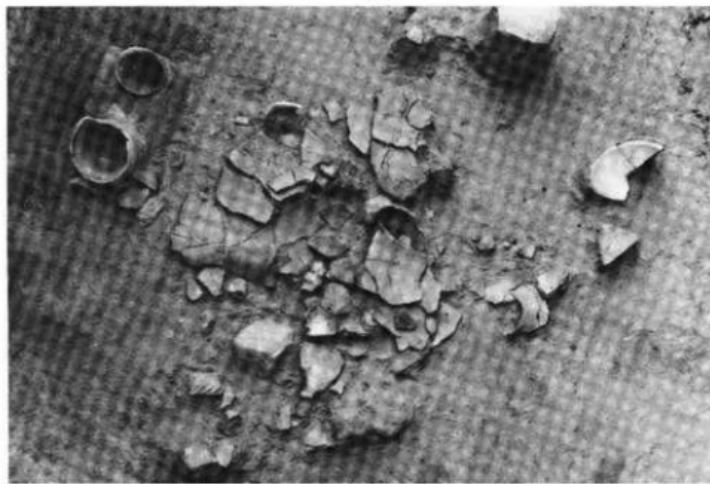
2号住居跡（東から）

図版 2

浦田遺跡(2)



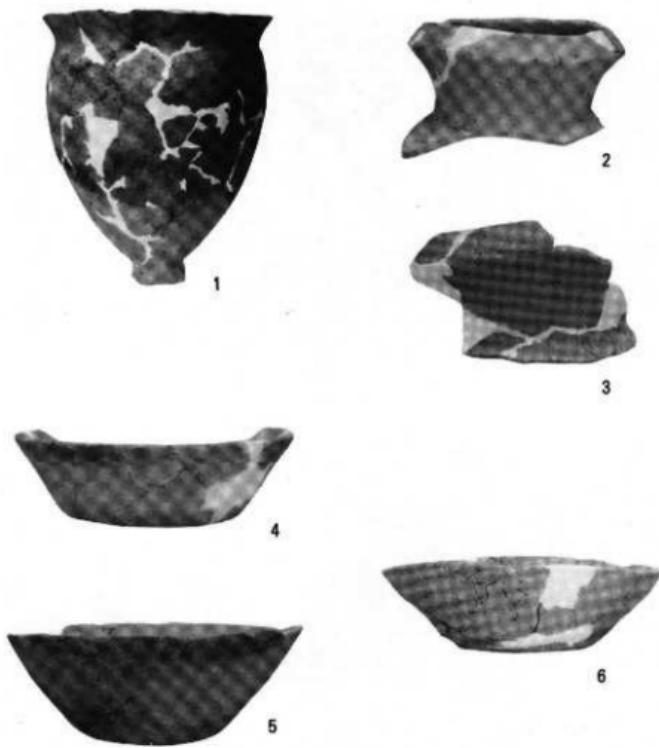
1号土塙



1号土塙遺物出土状況

図版 3

浦田遺跡(3)出土遺物



1～3 1号土塁出土

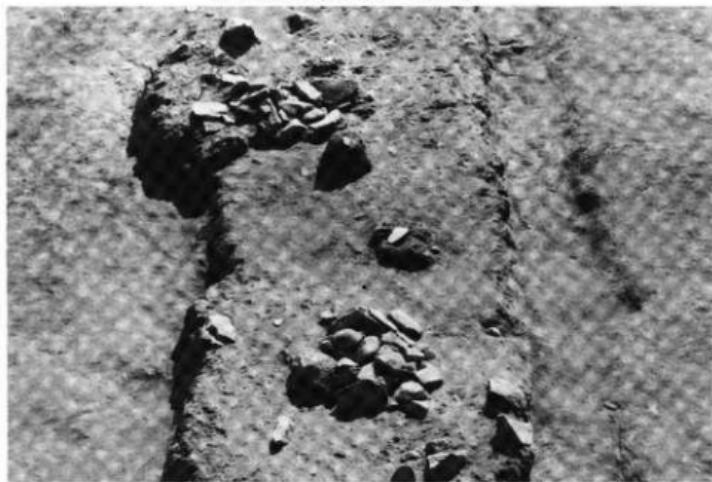
4～5 2号住居跡出土

図版 4

堂地西遺跡
(1)



A区旧石器時代集石造構（第7図）



A区旧石器時代集石造構

図版 5

堂地西遺跡
(2)



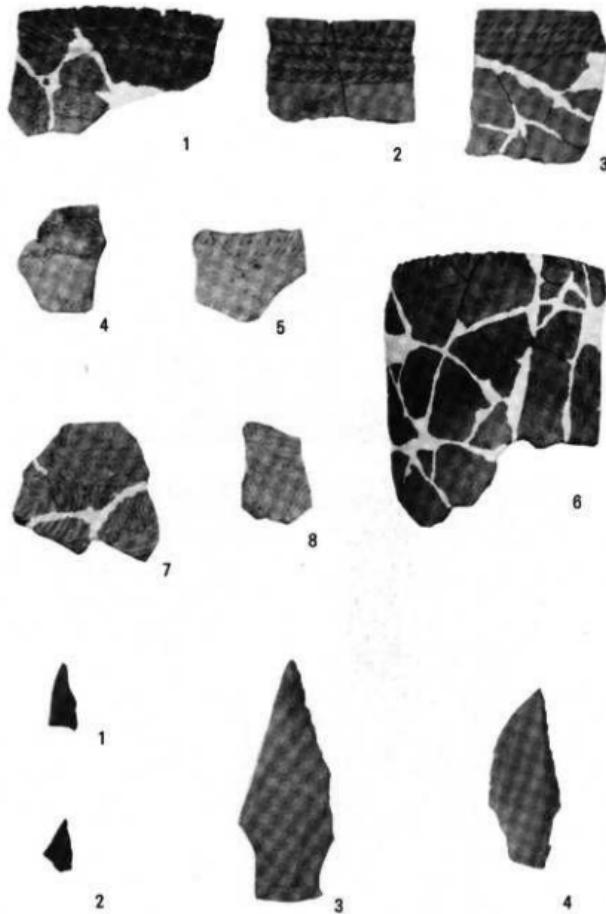
A区全景



B区縄文時代集石遺構（第11図）

図版 6

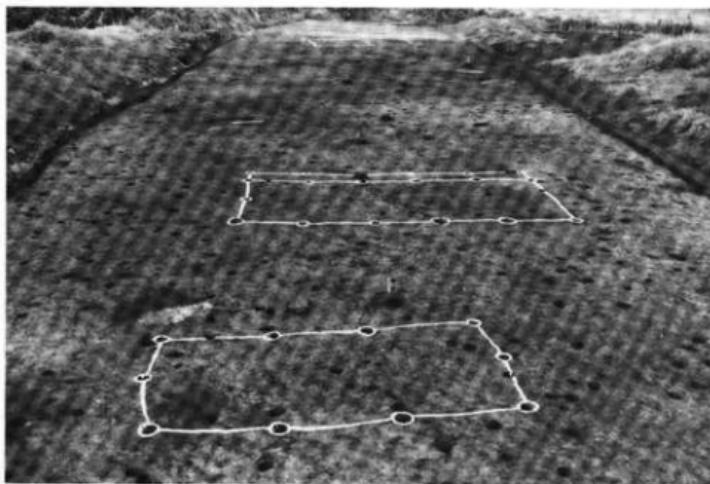
堂地西遺跡(3)出土遺物



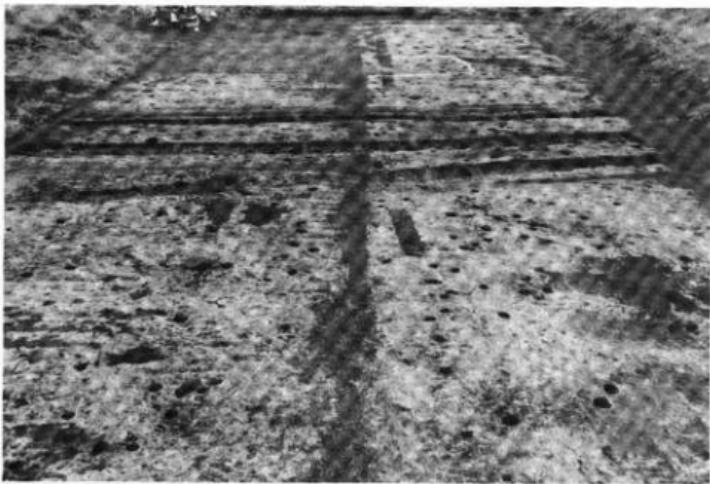
堂地西遺跡出土遺物

図版 7

平畠遺跡(1)



南北道検出据立柱建物跡（南から北半分を見る）



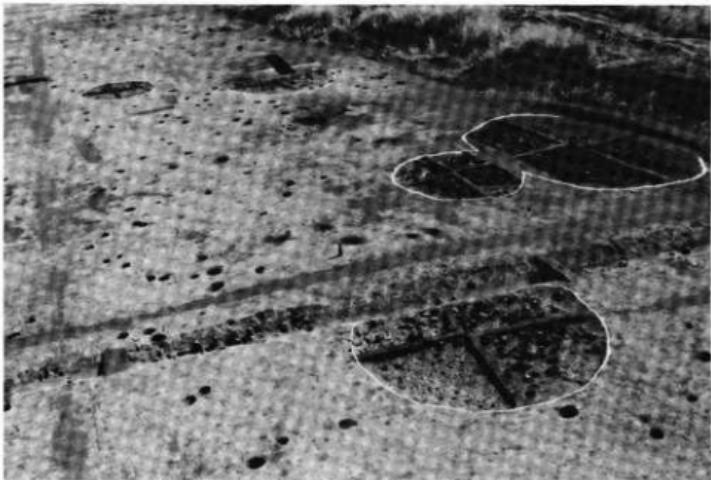
南北道検出据立柱建物跡（北から南半分を見る）

図版 8

平畠遺跡(2)



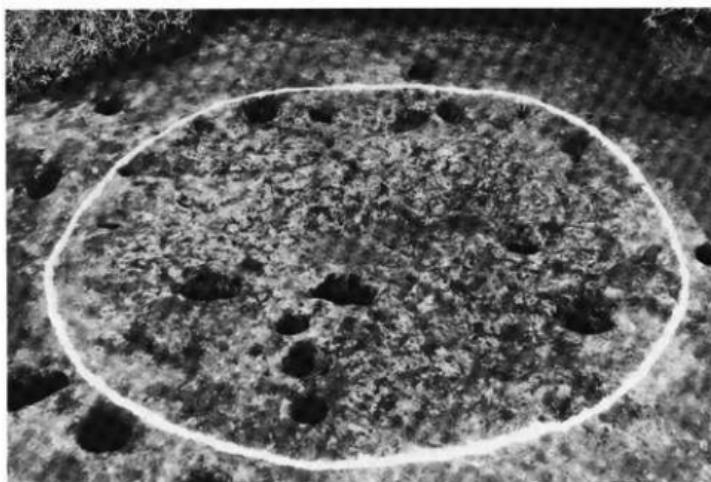
東西道検出堅穴住居跡群（東から西半分をみる）



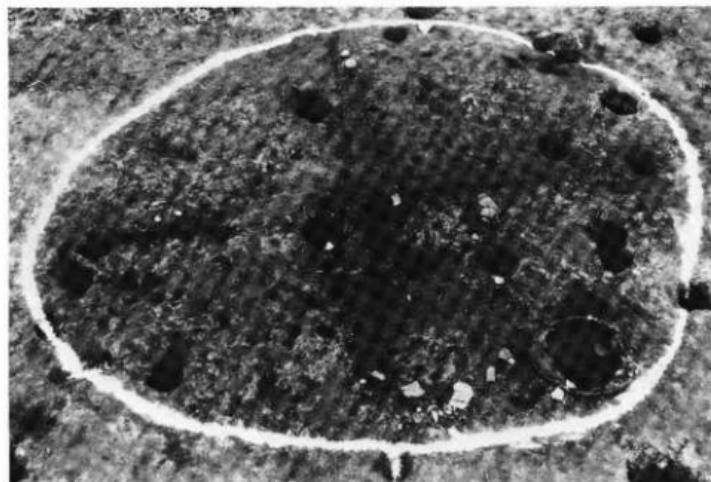
東西道検出堅穴住居跡群（西から東半分をみる）

図版 9

平畠遺跡(3)



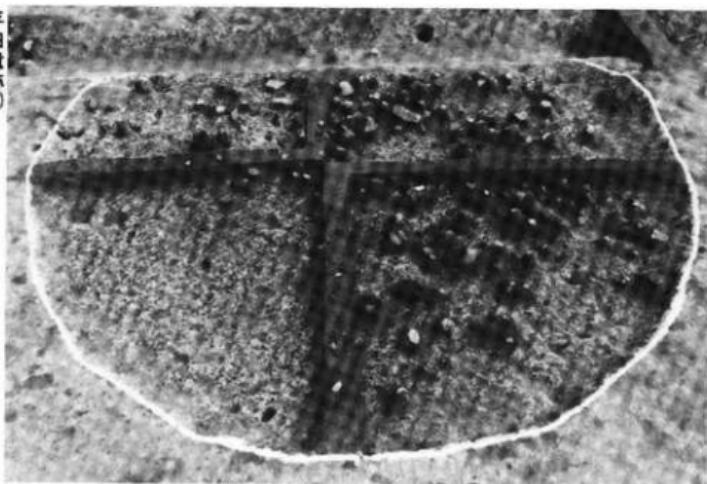
SA 28プランの状態



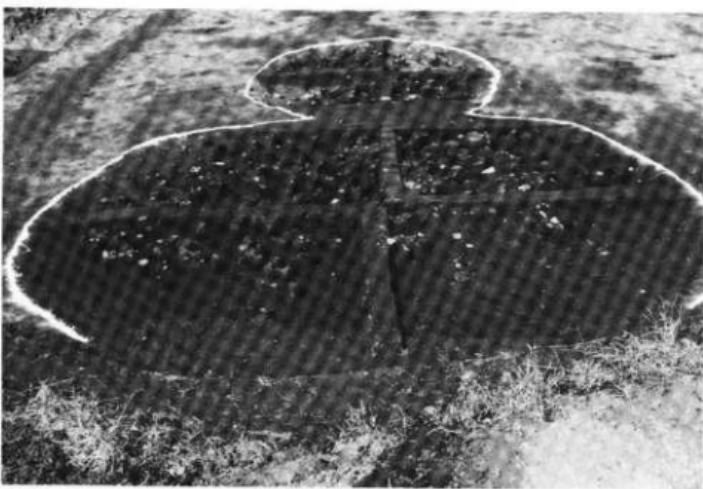
SA 30検出の状態（右下が埋甕）

図版10

平
烟
遺
跡
(4)



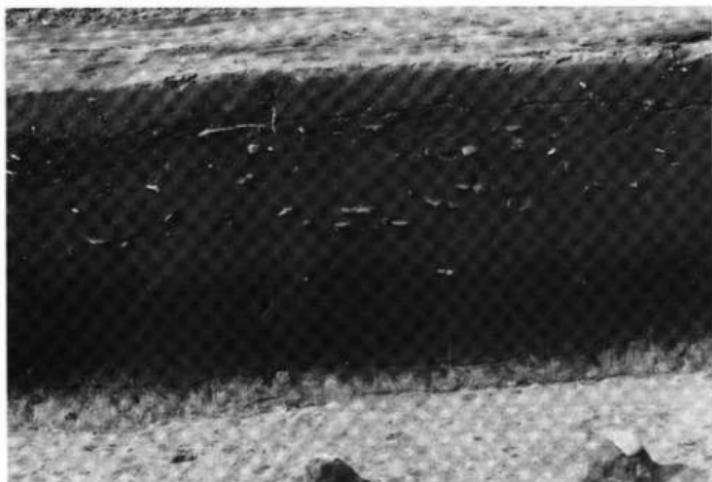
SA 32検出の状況



SA 33・34検出の状態

図版11

平烟遺跡(5)



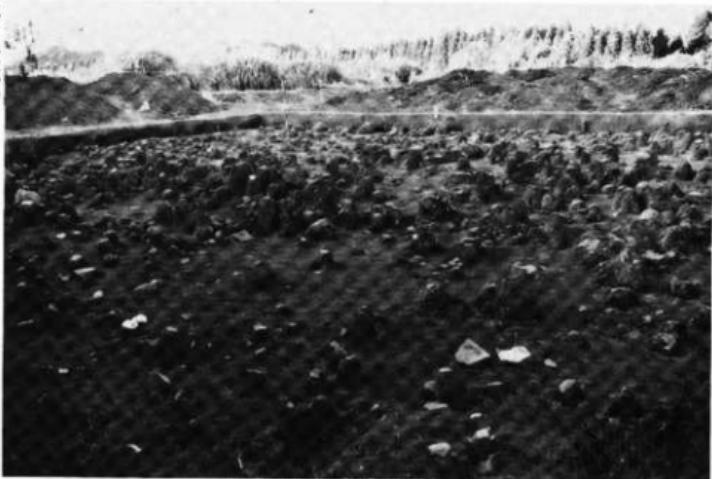
XXIV区西壁土層断面（一部）



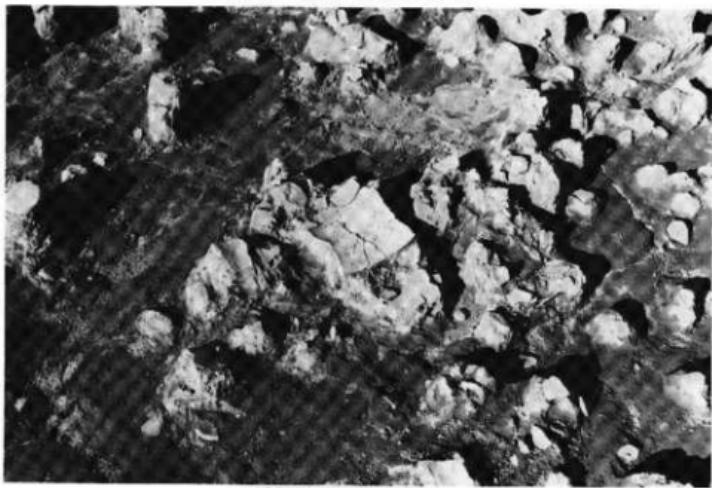
XXIV区岩偶出土状況

図版12

平
烟
遺
跡
(6)



XXIV区遺物出土状況（南から）



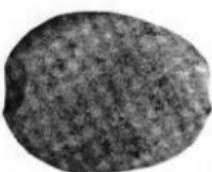
XXIV区遺物出土状況

図版13

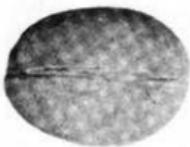
平畠遺跡(7)出土遺物



SA33出土



SA35出土



各種石錘・土錘



XXIV区出土

出土遺物

図版14

堂地東遺跡
(1)



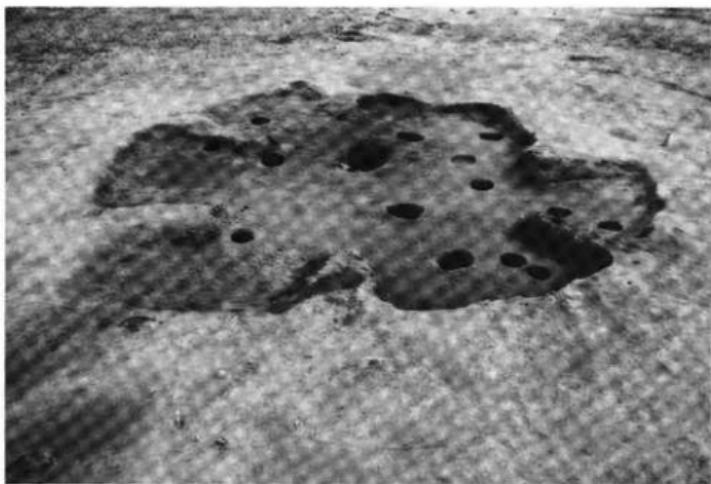
遺跡空中写真全景

図版15

堂地東遺跡
(2)



第5号住居



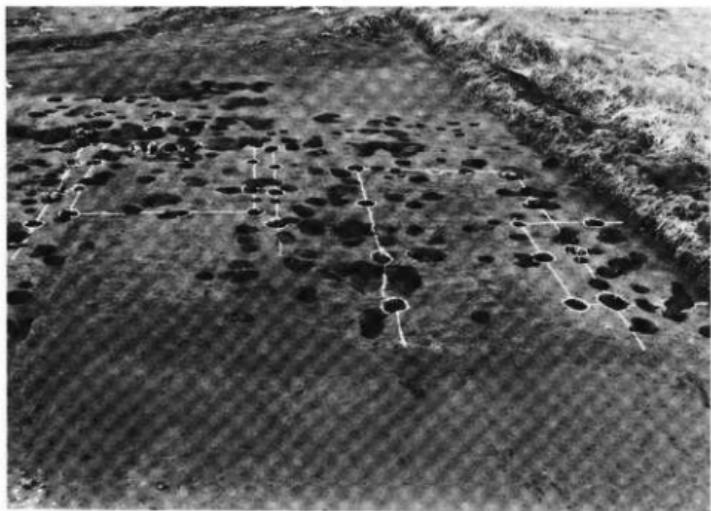
第7号住居

図版16

堂地東遺跡
(3)



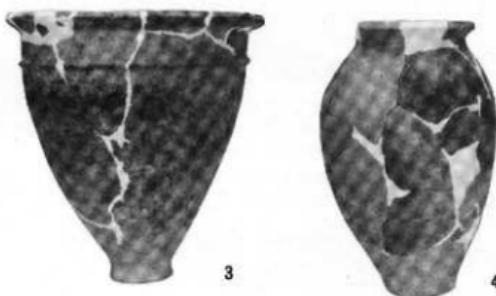
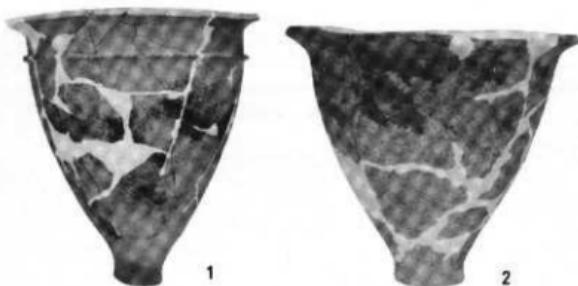
第16号住居



XXIV区据立柱建物

図版17

堂地東遺跡(4)出土遺物



- 1・2 5号住居
3 6号住居
4 16号住居
5 12号住居

堂地東遺跡出土遺物

図版18

熊野原遺跡(1)



熊野原遺跡B地区（東より）



10号住居跡（南より）

図版19

熊野原遺跡
(2)



12号住居跡（東より）



12号住居跡遺物出土状況